明治二十九年

女學雜誌

九月
刊行

第四百貳拾六號目次

女學雜誌

第四百貳拾六號

明治二十九年九月二十五日發兌

社説

文界の閨秀

嘗てビーチャー、ストウ夫人のアンクル、トムス、ケビンを讀み、胸を撃つて泣いて曰く、是ある哉女性の文學、閨秀の筆斯の如くして則はち神靈に達すと。

天下何の日か奴隷なきを得べき、世界何れの時か慘逆なきを得べき。天變地妖の四時絶えざるが如く、人事の波瀾遂に止む時なし。不幸、涙にむせぶもの、悲歎、熱血を吐くもの、夫れ幾何ぞ。審らかに慈眼を開きて同情の念ひを寄せなんものは、慨然として天下の泣に泣き、天下の悶えに悶え、片時尙ほ安きを得ざるなるべし。抑そも能く此の眞情を寫すの文士は何人ぞ。

方今彬々文士雲の如く林の如し、修辭美文の進歩驚絶するに足るなり。もし試みに今年の文を取りて十年以前の文に比せば、誰れか愕然として万里霄壤の差の太甚しきに驚ろかざる。正に是れ泰平、文運の郁々乎たるものと云ふべし。

文士寫生の妙既に極まれりと云ふべくして、而して尙ほ一事の深く遺憾に堪へざるものあり。他なし、一面暗黒の徒の所懷の未だ知らるゝとあらず、又念はるゝとあらざると是也。

乞ふ看よ、四方逆境の輩は文明の歩みに後れて開化の繼兒となり、幾多の寵兒を怨望して、恨嗟至らざるなし。而して、器械滑らかに轉じ、車輪速やかに奔れども、彼等を音訪れて其の所告を聞かんとするもの稀なり。成長したる文化の孤兒無告の情を寄せん際なし。嗚呼、之に耳を傾むけて其の悲慘を聞かんとするものは誰ぞ。

戰勝の民意氣揚り、江岳を呑吐して慨然たり。意はざりき、不幸可憐の族を忘却して一天皆な春の如かり。此時に方りて、能く暗黒者の衷情を告白し、酒池肉林の食卓に一滴の涙を添へしむるものは誰ぞ。一將の功成れるは万骨の枯れし

が故なり。勳爵の光輝々たるの陰、墓邊苔露にうるほひ、手向けの花袖に志をるゝの歎きは、抑も誰ありて告ぐる。四千万の同胞家なきはなし。家必らずしも和樂するものゝみならんや。家庭の亂の激烈なると國家の亂に劣らず。其の泣けるもの、義死するもの、殉死するもの尠少ならんや。而も能く其の情懷を代言して、無名の鬼を慰さむるもの多きを得ず。處女の歎き　貞婦の誠、寡婦の忠魂は、英雄の義膽と同もに日月を爭そふに足らん、而して能く其の情操を告白して、不言の愼しみに同情を與ふるもの亦多しとせず。才に老に文に巧なる幾多の文士中、敢て之に任ずるものは誰ぞ。若し夫れ、閨秀の至誠に至りては、男性たるもの遂に能く其の淵源を知らんや。偶たま淺策を投じて覺束なき探りを爲すとも、女性が熱切痛遠の秘密に達せんとは遂に企及する能はざる所ろ也。某女史、靑年文士が女子を寫すを讀んで一笑して曰く、婦人の情豈に如此く淺墓なるものならんやと。大凡そ、男性の書する所、其文の妙なるものと雖ども、何ほ此の非難を蒙ぶらざるもの稀なり。英雄にして初めて英雄を識らば、婦人の情懷は只だ婦人にして知るべき也。左らば能く之を描寫するものは誰ぞ。

彼の露の脆ろきに涙を落し、雲の果敢なきに哀れを催ふし、一草の花の健氣さに情けを寄せ、虫の訴ふるに腸を斷つの類、大率ね、世人普ねく見すぐしにする所ろに反りて濃やかなる愛思を許すは誰の天稟ぞ。道に肉を添へ、理わりに生命を與へ、天下の輿論淸議を活ける人物の如くに感慨して、之に我情を獻じ、亦た人の情を獻ぜしむるの熱力は、誰が所有する所ぞ。惟みるに、此般の事は、寧ろ女性の長所なり。

左れば、世の閨秀文才に望む所のもの太はだ切なるあり。諸君の任とする所ろ重大なりと云つべし。諸君もし一と時の喝采を可とせず、才敏の發露をもて足れりとせず、別に至誠止みがたきもの内に鬱結して而して施こして之を筆端露點々の下に落さば、其人心に浸潤して天下蒼生の活泉を動かさんと幾何ぞ。ストウ夫人曰く、妾を指ざして自から小說を作せしものとなすとなかれ、作せしものは天なり、妾は只だ謹んで之を筆記せしのみと。嗚呼　閨秀の至誠此に至りて初めて神靈の名作を得ん哉。

女子高等教育の器關

『戰爭以後女子教育は勃興すべし、而して女子教育中、高等女學校尤とも全盛すべし』と豫察したるは既に一歳半の昔しにてありき。而して、今の實況は果して然かなり。

眞とに今は高等女學校全盛の時期なり。低等なる一般の女子普通教育は既に天下に普及すべき盛運に達したり。此の方面に於ては亦た憾みとすべきものなけん。

但だ夫れ學科の低等なる、男子の中等教育にすら比較すべくもあらず。稱して高等女學と云ふは、單に小學に對して名くるもの耳。所云ゆる高等なる女子教育の器關の備はらざるや、依然として舊の如し。

啻に備はらざるのみならず、彼の師範學校女子部をすら廢止せんとするものあり。其理由とするもの丶一に曰く、戰勝の國民に重んずべきは、尙武の氣象にあり、女子教育は美を奬勵して人心を柔弱にす、則はち尙武に不利益なりと。今にして尙ほ如此き抱腹絶倒の論議を聞くとあり、女學に對する普通の識見亦以て推察すべし。

時論尙ほ斯の如くなるが故に、女子高等教育を奬勵するの刺戟は一日も休むべからず。休めば則ち全く廢絶せん。抑そも今は、女學維新の時機なり。女子普通教育の普ねく行はれんとすると同時には、之に率先し、之が教導を任とすべき高等女學士の輩出するとを期圖せずんばある可らず。然らざれば、女子の普通教育に任ずべきもの遂に久しく男性たるべき乎。是れ眞に穩當ならざるの數なり。

故に、吾人は中央なる高等女子師範學校の擴張を熱望するとともに、各地方尋常師範學校女子部の完備と伸張とを同時に熱望すると切也。而して、之が入校候補者の撰定に一層の細心を掛けて、現に教育を以て任とするものにあらざれば留學を許さゞるとすべし。漠然たる百の卒業生あらんよりは、堅固なる十の卒業生あらんを可とす。今の女子部廢止論の多數は、其卒業生の行爲に激して起る。而して卒業生の行爲の然かあるは、必竟入校撰定法の當を得ざるに歸すべし。

女子師範學校の擴張を希ふと同時に、大學の門戸の女子の爲に開かれんとを望む。今の如きは、撰科生としての入校をすら拒絶せらる。これ何の理由ぞや。もし適當合法の候補者

あらば、之を入校せしむるに何の不可ありや。或ひは曰ん、男女共學の不都合を感ずれば也と。堂々たる大學にして男女席を同うするに何の不都合かある。もし其の學力の足らざるが爲めと言はゞ、試業あるにあらずや。未だ初めより試みずして即はち門戸を閉すは其の學力の爲にするに非ることを知るべし。今や、文部及び醫業の撿定試驗には、男女同様の格に列す。就中本年の文部撿定試驗の如きは、委員皆な女子受撿者の優等なるに驚絶したりと言はずや。ひとり大學にして時に後れんとするは何事ぞや。

此他に吾人の希望措かざる所のものは、他日の女子大學となるべき高等女子教育の器關の、今にして速かに勃興せんこと是れ也。大事業の成る一日の故にあらず、左れば、之に着手することや亦た遠大迅速ならずんばある可らず。吾人は熱意ある有志の挺然として之に任ぜんことを勸奬す。

野に山にうかれ〳〵てかへるさを
ねやまでおくる秋の夜の月

女學

女權伸張の方面

古へより女子の勢力のなき時代はあらざりし也。單に其の外形を觀て表面不自由の狀態に驚き、女子の壓制せらるゝと斯の如しと慨歎するものあれども、審かに其の眞狀を察すれば、意外の事情あつて存し、反つて女子の勢力の強大なるに喫驚することならん。婦人のうち、人に玩弄せらるゝとの甚しきものを考ふるに、藝妓の如きは其の隨一なり。蓋し人に馬鹿にせらるゝを以て商賣とするゆゑなるべし。然るに、一度び内面の事相を觀ずれば、馬鹿にすると思へる人が即はち馬鹿にせられ、彼女の誘惑に魅入られて身躰自由を得ず、非常の束縛を蒙ぶつて其の奴隷の如くなるものゝ、反つて有髯男子なることを思はゞ、實際の勢力の潜む所ろ稍や察することを得べし。故に、閨門女房の内に閉ぢこもり、自由に新鮮の空氣を呼吸せざるほどの待遇を受る婦女子は、外見太だしき束縛を蒙ぶ

るが如けれど、斯る婦女子が男子の上に及ぼす勢力は非常なるものにて、其の閨門女房の内に踏込んだる男子は殆んど婦女子の爲に擒にせられたるに同じ。則ち此の狹隘の暗室に束縛せらるゝものは、女子にあらずして反つて男子たるとを知らん。此を以て、支那、朝鮮の婦人の如く、常に一室に閉居して吾良人の外に面を接せざる女性は、其良人の上に莫大の勢力を有す、其の强猛なると到底西洋婦人の及ぶ所ろにあらず。

左れば、愍じいに、外形の改良を圖らんとして、只だ古來の習慣を變じ、過渡移り行の動搖に折角の權威を落して、實際の勢力を減却するとなきに非ず。一概に女權を伸張せんとする盡力の反りて反對の結果を招くとあるは之が爲め也。

惟んみるに、吾國婦女子の狀態も亦た之に似たり。家庭に於ける實際の勢力は存外强大にして、西洋人が外見によつて批評する如き景況にはあらず。故に、此邊の方向に於て其の權利を伸張すべき必要は左程に多しとせず。但だ尤とも力めざる可らざるものは、即ち、社會上、法制上に於ける權利の伸張即ち是れ也。

民法實施せらるゝに及べば則はち此邊の保護助長尠なきに非ず、追々は此方面に於ける女權著るしく發達するを見るなるべし。但だ其の實施を穩やかにして法理と人情との折合を滑らかにし、優に麗はしく權利の伸張を圖るに非ざれば、其の結果も亦た意外の邊に暴發し、不本意の失躰を意はざる所に現出するに至らんか。

左れば、女權擴張の事業は、一日も中止すべからざると同に、着手の方面及び手段に就ては、仔細に研究考査せざる可らず。暴りに無用の地を叩いて、意外の影響を惹き起すの愚を演すべきにあらず。

但夫れ絶呼して速に改ためざる可らざるは、女性を劣等視し、若くは玩弄視して、之を男子の爲めに賦與せられたるかの如く見做す無禮至極の野蠻思想にあり。此の思想を打破改革するは、女權伸張の根本事業なり。此に因縁する種々の悪制度――即ち、公娼、畜妾の類の速かに排斥せざる可らざるは、亦之の故也。

女徳の美観

鷗村生

貞女兩夫に見えずと、古聖人が誡め置かれたるは、其昔には、或は妻たるもの、不幸にして、其夫と死別若くは生別の悲しみをなしたるの後とても、決して再度の夫に歸ぐべからずとの意義にてもやありけん。されど自ら進んでこの訓戒を守操するはよし、さもなきに万人をして、この嚴酷なる規律に、强ひて服從せしめんとするは、頗る人情に戻れることなれば、學說正大に、理義分明なる、今の世までも、さる壓制苛酷なる道德說を維持せんこと、甚だ誤まれりといふべく、彼訓戒は正に、女子は同時に二人の男子に添ふべからずといふ、いとも明瞭なる人倫を規するものとして見るべきなり。福澤翁なども、此頃頻りに此義を論ひて、若き未亡人をして、鬱憂隱々の裡に寡居の苦味を舐めしむるは、即ち女性の眞相たる愛情を賊し、且や淋しさの思ひに、憂き節しげき歲月を送るが中には、人身の生理欺く可からず、精神爲に枯衰し、遂に病魔の犧す所となりて死する例も尠からず。結婚は人生の一大事、一旦赤繩の緣を結びたる以上、夫婦爰に同躰となれば、漫に之を破るべからざるも、死生命あり、人世死別の悲痛あり、夫死するの時に於ては、翻然覺悟を改め、第一生の昔を忘れて、神氣爽然、第二生の境界に入ることそよけれ、これぞ世路に旅する女流が、大自在の安心法なるとの趣旨を說きたり。元良博士もまた曾て略同樣の說議をなして、東洋流道德の羈絆より、寡婦の身を天放自由ならしむべきをいへり。

古來峻嚴なる東洋の道德論者等は、寡婦の再嫁を以て、甚だ許し難きの事となし、彼等に向つて、獨居守節を强ふるにいたれり。印度の寡婦の慘狀は即ち其結果の極點に達せしものにして、今猶天下に最慘事の一と數へらる。支那道德の寡婦を遇する、印度に於けるが如くに、苛峻其甚だしきに至らずと雖も、彼國人の理想婦人たる節婦烈女と稱するものは、多くは、是れ寡婦の再嫁を否みて、痛苦に堪へ鴆を仰ぎ、刃に伏したる徒なり。而して世間は斯る者の爲に讚嘆謳歌し、此流を出したるの地は其門閭に旌表せられて、鄕黨之を榮とし、太守刺史は、自家の勳績の中に數へらる。さればにや時には殘忍なる官人の、新に所天を喪へる婦人に迫りて、心ならざ

る、敢なき最期を遂げしめて、彼官人は、得たり賢し、此女の爲めに節婦の墓を立て、かくて彼が治績の榮譽を詐はるとあり、事情如斯くなれば、嚴酷なる支那道德の制裁は、嫠婦が綿々嫋々の恨みとなり、古今の詞客騷人を通じて、慘憺たる悲韻を千載に流せり。我邦の道德は、之を支那に受く。故に彼の女德は、即ち我の女德なり。我と彼と理想婦人に於て一致し、共に彼所謂節婦烈女を崇拜し、士人法を立つる所、道德の制裁は、未亡人の寡居を强ひ、母の其女を敎ふる、常に此心得を以てす。素より其制裁、支那に於けるが如くに、峻嚴苛酷ならずして、寡婦再嫁は公然默許され來りたりと雖も、文化隆盛の今日に至るも、なほ之を以て女德に欠ぐる處なしとなす能はざるの感情は、士女の腦裡に遺傳せり。抑も彼東洋道德なるものは、男子の女子を規すると、頗る嚴酷に自ら許すと、甚だ寛大に、寡婦の貞操を要求して、自ら妻を代ふると敝履の如き、不法、不公平爰に至りて極まれりといふべく、况んや、寡婦の再嫁なるものは、理に於て、德に於ても毫も損する處なきをや。

東洋道德のかく苛酷不法なるに反して、今日西洋道德思想の根原たる、基督敎の倫理に於ては、明白に、寡婦の再嫁を許容せり。基督は七人の兄弟を遞次に夫と仕へたる一人の婦に向つて、死は此世の夫婦の緣を斷了するものとの意を示し、ポーロも此旨を說き。而も公に寡婦の再嫁を奬めたることあり。素より一旦夫婦一躰となりたる以上、男よりするも、女よりするも、漫りに生別の斷緣を行ふべからず、之を大なる罪過の中に數へ、また離緣したる男女の再嫁再娶を制限する嚴正なりと雖も、死別一旦夫妻の上に臨むときは、未亡者が再緣は公明正大に承認せられ、而もポーロの如きは曾て其願望を表はして、年少寡婦の再嫁し、子女を產み、家を理めて、敵者、口才なき者に、僅にても譏らるべき機を得しめざらんとを求めたり。この倫理思想は、即ち傳はりて現代の泰西道德をなし、之を東洋道德に比するに、頗る自由寛大によく人情を擁護し、之を受けて、當に我邦の道德主義たらしむべきなり。

寡婦の再嫁は常理なり、社會の道德は、明に之れを承認すべきなり。然るに今爰に吾人は、一方には寡婦が再嫁し、また假令三嫁するとも、吾人は其決して女德に損傷することなく

而も是れ彼等を、生理の病害より救ひ、精神の鬱狂より放ち正しく再び其天分に起たしむるを得るものなりと信ずると敢て彼の識者に後れざるべしと雖も、他の一方に於て、吾人は往々寡婦の、眞によく其貞操を守りて、終身寡居して再嫁せざることのあるを見、女德の美觀大に爰に存するを思ひて、讃嘆の情に堪へざるなり。一度び偕老同穴を契りて、百年の情緣を約し、室家を營み、子女を養ひ、和樂の天地、久しく盡きじと思ひしに、思ひきや、無情の嵐、一夜猛然として襲來し、いつの世、如何なる時までも、共に〳〵と誓ひてし所夫忽然として、眼前に逝くを見るの日に至りて、哀痛禁せず、日夜熱涙を呑みつゝも、飜然として、形骸の夫婿、既に氓ぶと雖も、念中の愛人は永遠に生きて、情操互に變ることなきを悟り、多艱多苦の裡に、遺孤を育て、遺志を紹ぎ、終世志を變へざるの寡婦は、吾人が今日の擾々たる人寰に於て多く見んことを望むものなり。ポーロも寡婦の再嫁を奬勵しつゝ、如斯き寡婦は之を讃して、眞の寡婦と呼び、人に對つては、之を尊敬好遇すべしと敎へたり。

亡夫の遺見ある寡婦にして、自ら固く貞節を持して寡居するものありと雖も、又其再嫁を欲するも貰ひ手に乏しく、それが爲めに、己れには左程堅き志のあるにてはなけれども、事情止むを得ざるに逼られて、寡居の苦節を凌ぐもの多きなり。彼等の中にも、甚だ賞美すべきものあれど、また時には不德の汚行なきまでが、感心すべき位のものも尠からず。さる者の爲めには、念中の良人も、既に亡して逝き、彼等に於て吾人の爰に美と觀ずるものあるを知らず。然るに今さる是非なき境遇の爲に支配さるゝきはみにはあらで、遺孤の存するにもあらず、剩へ年齒猶うら少き寡婦の、終生有髮斷髮の尼を覺悟するもの、または約誓既に成りて、未だ室に入らざるに、未來の婿氏忽然として逝水に誘はるゝを見て、一生寡婦の殘命を追ふもの、或はまた、夫未だ死せざるに、あはれ未亡人に情操を潔くするもの、如斯くに、亡人在世の恩愛の、いつの世にも忘られ難きに、堅貞苦節に甘んじ、悲哀痛嘆の境遇に安んじ、一生念中未亡の良君に奉ずるの婺婦は、吾等の祖先は之を稱するに烈女節婦の芳名を以てして、理想の婦人となすことや、彼忠臣が、其生命を捧げて仕へまつれる君と幽明を異にして、哀痛禁せず、或はまた讒口の毒辯に

奉祿を三代相恩の主より奪はれて怨訴せず、時運悲しうしては、主を代ふると、敢て臣節を傷けずと雖も、故主前君が恩遇の意氣に感じて、爲めに野に山に、身を埋木の、また世に花咲く春を待たず、あたら名器を迍邅疾苦の生涯に葬り、再びは、他主の粟に養はれざるものは、古來人臣の龜鑑として、其美操、武夫が平生の理想とする處なりしと、並び稱せられて、天下の美事たり。忠臣節婦が、其實例のあまりに美しきに、之に傚はせんとて。人臣一生二君に仕へず、人妻一生二夫に見えずとの、究屈なる道德制裁をつくりて、果ては人情に破し、常理を傷りけん。竊に思ふ、彼聖賢は蓋し、忠臣貞女の事蹟を感嘆するの餘、忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見えずとこそは、讃美せしに外ならざるべけれ。之を以て万人を律するの苛法となせしは、其過ち必ずや後人に在らん。寡婦守節して獨居に安んずるの美しさ、吾人は之に違ふものを以て女德の最も大なるものを破るものなりとなすの不理に居らずと雖も、なほ之に大なる同情に寄せて、この女德の美觀を感嘆す。

女德の美しきは、世に美しきものゝ最なり。其美しきとを數ふれば、良妻内助の力あり、賢母育英の功あり、嫉妬怨恨せざるとあり、其他讀めば盡きじとも、寡婦貞操の美しさは、美なる女德中の、尤も美なるものたるべし。今の世泰西道德の主義、かの苛酷壓制なる東洋の道德主義に代りて、弘く行はれんとし、識者頻に寡婦の爲めに、再嫁の是法を説くの時、吾人は寡婦貞節の甚だ美しきを感嘆して、今殊更にこれを説く、之を説く所以、蓋し怎生に理に叶ひ、德に背かざるととはいへ、前夫の墳墓未だ冷かならざるに、既に後夫に歸ぎ、故人の恩情を忘るゝを、あまりにも速なるに似たる輕薄なる寡婦を見て、頗る滿足する能はざるものあるを以てなり。而して此女性の美觀の場合が、地位を轉變して、男性の場合たるときにも、吾人は甚だ其德操を美として、我儘なると、女性に貞操を强望して、自ら之を守ると能はざる男子者流の中に於て、さる美觀に接せんとを望む。

望天門山　　李白

天門中斷楚江開、碧水東流至北廻、兩岸青山相對出、孤帆一片日邊來。

女子の職業

◎刺繡の內職

刺繡輸出向品は懸掛、椅子掛、額面、屛風、布團、寢卷、屑掛等にて、橫濱にて刺繡業者は門戶を張れる者九十六軒あり、尙ほ內職として之を營むもの及び刺繡業者の宅に養成しつゝある徒弟を合すれば三千人を越えて、同場工業者の第一位を占め、其問屋より受くる所の賃錢は一ヶ年二十五万圓に上るといふ。また英四十番の外人は五六十名の職工を集めて、盛に此業に從事せり。東京にては此業を營む者の數は、二百八十四軒なれども、其問屋と稱すべきものは、彼堀越商會を除き、橫山町汐留町迄に二三軒あるに過ぎずして、其八分までは橫濱の品を受負ひ居れりとぞ。東京にて女子の門戶を張りて刺繡業を營み居れるものは十六人あり、尙ほ之を細別すれば、芝區に五人、日本橋區二人、淺草區二人、四谷區二人、下谷區一人、本鄕區一人、麻布區一人、赤坂區一人、本所區一人、女子の刺繡業者は女子職業學校刺繡課の卒業生生徒を加ふれば一千五百人以上の人員ありといふ。

刺繡の賃錢　刺繡類は其地合に依り、又た其模樣に依り、或は其大小に依りて、價を異にすれば、其賃錢に一定の標準なし。されど大概は輸出向の最下等は一枚三十錢內外にて、上等には際限なく、內地向きの半襟類の最下等は、一枚十二三錢にて、上等は七八圓迄なり。而して上等の仕事は男子に屬す。女子の仕事には氣韻意匠に乏しく、其上等物と男子の中等物と匹敵する割合なりといふ。されば今日刺繡業普通女子の得らるゝ賃錢は一ヶ月三圓位より六圓迄に過ぎずと云ふ。

刺繡業者は男女の徒弟を養成するに七ヶ年を以て期限となし、其期限を經ざれば獨立の營業を許さゞる制規となしあり、之れも昔時は十年を以て期限とし、尙其上に二年の禮奉公をなすの定めなりしとぞ。共立女子職業學校にては、年長者は二ヶ年、年少者は三ヶ年を以て一通りの刺繡類を卒業せしむ。

◎造化の職業

本邦に於て西洋的造花即ち天然の花卉を摸擬したるものを造り始めたるものは、大坂の英三郞兵衞といへる人にて、元は染屋を營み居りしが、不圖一種の染色を發見し、之を巾地に染めて花卉を造りたるに殆ど生花の如く出來上りたれば、其後の工夫を費やして今日の眞品を製するを得たりといふ。日本的造花は重に在來の花簪或は意匠細工の簪を指せしものにて、花簪類は重に京坂地方にて製造せられて全國に輸送さるゝものにて、東京に於ける花簪の七分は京坂地方の製品なりといふ。

造花の職業は女子に適し、將來大に望なきに非ずと雖も、今日にては未だ十分の需用あらざる故之に依りて、自活の資を求むる如きは隨分困難なり、又日本的造花即ち花簪類に至りては、上等の細工は本職の男子の手に歸し、女子には只だ廉價なる粗品を造くるに過ぎざれば從つて、高直なる賃錢を得る能はず、今日花簪を製造する宅に通ひつゝある女子は、一日七八錢より十二三錢を得るに過ぎずといふ。

◎電報調査所の女子

東京江戶橋の郵便電信局にて、盛んなる日には一日二千通以上の發信あり、之に次ぐものは大坂の郵便電信局にて十日間に一万以上の發信數あり、其他京都、名古屋、長崎、神戶、函館等の電信局にては十日間に二三千通の電信を取扱ふと云ふ、左れば十日間に全國の各電信局より送り來る、電報原紙の調査は、中々莫大なる仕事なり、其仕事は頗る繁雜なるものなれば、夫れ〳〵の分課ありて、外國電報內國電報の大區別をなし十分して、發信、着信、字數、電報件數、電信料、鐵道電報等の區別あり、右の中にて女子の仕事となり居るものは、內國發電中の發信、字數、電信料、鐵道電報の取調にて、其他は男子の職員の務めとなれり。然るにこの調査所の女子は、先に報じたるが如くに、頗る良成績を奏し、其數は二十四人にて、其受持分科は

發信件數の調査十五人、　電報科計算四人
諸計算の再調査三人、　鐵道電報一人
取締一人

電報調査所の職員　は男女共ありて何れも通信局の傭ひなるが現今在勤の女子は十六七より二十二三迄のものなりと尤も夫あるものは採用せられざる規則なれば

獨身者なりと知るべし給料は日給の制にて最初十五錢より始まりて十六錢十七錢となり今日にては二十二錢を得るもの最高に位し居れりと云ふ就業時間は冬季は午前九時より午後四時までにて夏季は午前八時より午後二時までなり調査所員とならんと欲する人は調査所に向け願書を差出し置くときは缺員を待つて呼出さるべく其際簡易なる試驗を受け及第の上職員を命ぜらるゝなり試驗の課目は電信取扱規則、作文普通消息文球算(加減乘除)等にて高等小學校を卒業し居れば差支へなからん

○○○

報知新聞が『女子の職業』の調査報導を始めてより、爰に四閲月、十二種の職業を紹介し、尚ほ多くの報道すべき種類ありと雖も、溽暑の時期中故一先づ之を中止して、更に秋涼の時を期すといへり。吾人は、該新聞の此報道が、吾人を益したるもの尠からざるを信じ、されば吾誌上、之が要領を拔錄するに勉めたるもの、讀者と共に、該新聞に向つて大謝せずんばあらず。冀くは金風梧桐を拂ふの日、再びこの有益なる報道調査の續稿に接せんことを。

評論

兩極の想念

靜淵

極端と極端とには、眞理宿らず、中正を以て君子の道となす孔子の曰く、道の行はれざる我之を知る、智者は之に過ぎ、愚者は及ばずと、蓋し過ぎたると及ばざるとは、共に中庸を失したるものとす、此故に君子は過不及なからんことを欲す、

當時の社會進歩の度に比して、以て過度に卓絶したる人物は其社會に容れられず、ソクラテース、孔子、基督の如き、其好例なり、大音は希聲、大巧は拙なるが如し、輿衆之を認めて例外とし、不思議として共に與みせず、而して極端の想は幼稚なり、中庸の道は絶對對的にして、發達したる所の念となす、近時科學の進歩は何れも之を許さゞるなし、心理上に於て、天才と狂氣と往々相近しと說き、社會上に於て、餘りに卓絶したる人士は、變則なるもの、普通大數の赴く所を以て正則となす、げにや學問の道、斯く認めざるべからざるなり。

一派の人士が、宗教の發達を觀じ來りて、無下に之を排し、幼稚取るに足らずとなし、又は形而上學的空想に走るも均しく取るに足らずとなす、斯くて實驗觀察により、能く了解し易きものを道となさんとする如き、蓋し正則を得んと欲するものなるべし。今日の科學なるもの皆此傾向を帶ぶ、吾人は此傾向を多とし、確實なる智識の開發を期するもの也。

夫れ然り、然るに余輩平生、兩極端の想念を主唱する所以のものは何ぞ、蓋し、余輩の持論として兩極端說を喋々す

るの止むを得ざる者あるなり、曰く上端には飛切の改革說、純潔高尙にして無上の理想を措き、下端には社會最暗黑面の實況、不幸短命慘絕悲絕の有樣を見るべし、と。蓋し惟ふに極端に走らんとする勇氣ありて始めて中庸を得べし、始めより中庸を得んとするものは、遂に中庸を得ることなからん、必ずや先づ無上飛切の空想を懷きて絕對的希望を大にし、悲慘極まる狀を見て、同情、可憐の人情を起すべきなり。即ち余輩の見に依れば、中庸は君子の道、是れ正則なり、是れ科學の法なりと雖も、始めよりして中庸を志すものは、之を得ると難かるべし。

社會の現象を見るの眼識に乏しきものは、先づ家庭に就て學ぶべし、家庭を學ぶの眼識なきものは、自己一身の經歷を顧みるべし、一身の經歷はやがて社會進化の片影なるを見、家庭は之れ一社會の如きものなるを認むることを得べし、家庭に對すると社會に對すると國家に對すると、人情の厚薄自ら異なるものあり、而かも人情の厚薄を外にして、先づ家庭と社會とを比較し來れ、交際、禮儀は素より、百科の現象、一々比論し得べきものならずや、社會に在る如く、家庭には千種万樣の現象あり、爰に心理を學ぶべく、經濟を學ぶべく、社會の進化の片影を學ぶことを得ん。

小兒を育つるに當り、父母の行爲如何かある、其遊樂せしむるに於ては、或は馬となり、犬となり、小兒を載せて座中を走る如き、外貌甚だ奇なるが如きも、小兒と父母とは同身一躰、幼弱の兒、最も父母の愛する所となる。夫れ父母の小兒に對する時や、自然の情なり、人爲、外聞を心に期して、態と粧飾するにあらず、人情の濃厚なる所以斯にあり、而かも斯の如き父母の行爲を指して、上古的なり、幼稚なり、中庸にあらずと云ふことを得る乎。

翻て社會を見よ、一家に小兒の在るが如く、無智の徒あり、野蠻なるあり、飽食逸居の外、敢て團躰の爲めに盡粹するの精神なきものあり、惡德、狡猾の輩多しとなす、恰も小兒の家庭にあるが如し、一方より見れば未だ發達せざるものなり之を撫育し之を開發するを識者の任となす、吾人が團躰に屬する下等社會のものを慰撫し之に同情を表し之が爲めに心を勞するを以て、幼稚なり、中庸に非ずと云ふことを得る乎。

惟ふに何人と雖、以上二事實を以て幼稚、上古的、過不及の行

爲なりとして排斥し去るものなからん、若し夫れ之を以て正當なりとなさんか、別に一問題ありて存す。即ち思想界に屬するものなり。

社會の心理的現象、即ち言語、道德、宗敎、法律等の發達を觀れば、皆な之れ當時社會の生む所、當時代の精神の發達に比例したるもの、今日より之を見れば上古的なり、幼稚なりと認むべし、されば思想發達の順は、宗敎的より形而上學に移り之より科學的に移りたりとも云ふ、一身の經歷に徵し、社會の進化に例すれば、正しく斯論の當れるを見る、然りと雖も、此論には幾多の議すべきものあり、世の論者の云ふが如く應用し得べからさるものなり、歷史に徵して此傾向あるを認ると同時に、何時の世、如何なる社會にも三者共存するとを認め、又此三者の永續する所以を知らざるべからず、宗敎、哲學、美術、科學に對する性情あらん限りは、共に存在すべし、又此の如き要素を容るゝの性情を具へずんば、そは極めて偏僻なる人と云ふべし。

川の流るゝを理學的に釋義すると同時に、行く川の水は元の水に非ず、と觀じて諸行無常を悟り、又有常を悟り、宗敎的

に美術的に之を見るとを得べし、茶碗の破れたる、之を理學的に見る、何の不都合なし、之を投げ之を打ちたるが故に破れたるのみ、而かも一旦破るれば元の形となると能はずとて道德的訓戒を之より學び、一度惡事を爲せば、生涯之を回復すると能はずと觀するも、何等の不都合なし、惡事の行爲ある每に柱に釘を打ち善事を爲す每に之を拔き去り、已に一本を餘さずとするも、打ち付けたる形跡存すとて悲むは、道德上の觀として見るべし、理學的に見れば唯た柱に釘打ちたる跡あるのみ、月の滿つる又は缺くるの事實、天文學より見れば唯之れ一事實、而かも滿ちては缺け、缺けては滿つると云ふとより人生の常なき、榮枯盛衰定めなきを觀じ、又自らの年齡の重さなる次第を嘆ずる如き、何の不可なし。

要するに、天地間の森羅万象、社會の現象、人事一般、家庭の狀態、一身の經歷、大凡の事々物々は、科學的に解すると同時に、哲學的、美術的、宗敎的に觀ずるとを得、一人にして能く多角的に、諸方面より觀ずる人、之を發達したる人とは云ふなり、科學者として科學的に見るの外、美術的に見ると能はさるものあり、美術的に見るとを得るも、科學的に見

るを能はざるものあり、是れ共に正則には非るなり。

中空に懸る一個の月、古來、詩歌の材となり、宗教上の本尊となり、今は天文學にて究めらる、人若し天文學にて究めたる月の外、歌人の如くに宗教家の如くに月を眺むるヿを得ば其人や幸ひなり、地震、海嘯の理學的説明や吾人の「眞」とする所、理學的釋義や頗る吾人の要する所たり、而かも之を宗教的に觀ずる何の不可ある、之を幼稚なりとするは、宗教的に觀るの明なき人なり、嵐吹き荒みて草木動搖し雷電燦として輝く、之を理學的に見ると同時に、美術的に見て快感を覺え、宗教的に見て敬虔の情を起すヿを得、此時、單に理學的に見るもの獨り正則にはあらず、多角的に觀ずるもの之れ正則なり。

斯の如く、多角的、諸方面より一事一物を觀るヿを得るの人ならんには、中庸を得たるものと云ふべし、一方面よりのみ觀るものは極端なり、偏僻なり、幼稚なり、余輩は斯の如き意義に於ての中庸を取る、斯の如き見地よりして幼稚を取らず、世の論者と聊か趣きを異にする所以、玆に在り。

小兒と同身一躰の如く、小兒を遊ばするに小兒の如くなるの

父母は、小兒の如くして小兒に非ず、野蠻なる黒奴間に傳道するもの、黒奴に苦められ、衣食住を共にして毫も意に介せず、而かも其傳道者や黒奴にはあらず、天地無情にして動作し、因果の則ありて意識なしとするも、天地悲むが如く、泣くが如く笑ふか如く、森羅万象は之れ一個の活生物かと觀ずるの詩想、吾人は之を幼稚とせず

吾人の見に依れば、理學的解説を愚弄して、古代風にのみ天地、人事を見るものは、幼稚なり、然れども理學的因果の法則を認め、之を充分に信ずるの人にして、更らに美術的に、宗教的に見る人ならんには、是れ幼稚にはあらず、一事一物の現象に對し、單に宗教的に見るものは、妄誕不稽、神變不可思議の見に陷り易し、是れ一方面なれば上古的なり、又幼稚なり、何事も美術的にのみ見るものは、道德を蔑視し、人生を戲事となし天地を徒事の如く見做すの弊あり、是れ又一方面のみなれば與みし難し、或ひは科學的に見るといふは、尤も確實にして正則、實に眞相を認むるなり、而かも此一方面より見るもの、多くは半熟の徒、故に唯物的にして、人情輕薄、世界人生に對する大觀なく、一局部に跼蹐す、斯の如

きもの獨り人生を支配するに至りては、世は退歩すべし。所謂學者の弊なり、哲學風にのみ觀ずるものは、人生の歷史を顧みず、空理空想に走り、天地人生を一丸として觀するも、空中樓閣的に陷り易し、何れも要ありて何れも弊あり。

されば何れをも總括し何れをも具へて、多角的に觀るもの眞正の見解なり、中庸の道なり、一方面の說は何れも取りて以て則とすべからざるなり。

然れども此中庸の多角的觀念を得んと欲するには、美術的なり、宗敎的なり、科學的なり、共に其方面に專心し、執着して極端に走る丈けの勇氣を具へさるべからず、此勇氣なく、極端に走る氣慨なきものは、多角的となると能はず、ルーソーは敎育上自然に歸れと說く、虛飾の行はるゝ時、此極端を示すは可なり、平等說ありて差別說あり、自由民權說に對して强者權力說あり、個人主義に對して國家說あり、孔子は積極に走り老莊は消極に走りたり、凡て極端と極端とには、何れも眞理なし、而かも個人に走るものと、國家に走るものと、平等に走るのと差別に走るものと積極に至るものと消極に至るものと、共存して始めて中正を得るものなり、中正は是等の異主義、異思想の互に極端に走らんとするか故に生ずるものにして、物理學上の法則に均し、兩極の想に走らんとするもの平均せば中正を得べし、故に識者は始めより中庸をのみ說くべからず、中庸は圓滿の想なり、平等即ち差別、差別即ち平等と觀じつゝ、時處位に應して應病與藥の方便を取るべし、中庸は眞如なり、神なり、佛なり絕對なり、中庸の本躰は有るか如くして無し、無きか如くして在り、

戰後の狀態、人皆な國家主義を主唱し、拜金宗に叩頭せんとす、或者は遠からずして、厭世主義を主張し個人主義を皷吹すべし、極端に走らんとすれば、反動起るは社會の常なり、若し夫れ極端に走り過ぐれば、猶ほ及ばざるが如く害あり、而かも走り兼ぬる如き弱者のみなれば、是亦及ばざるものにて、嘉すべからざるものなり、進步的に極端に走る氣慨ある國民は、其反動にも意を向くるの能力あり、識者は宜敷、社會の運行を察して、極端に走らしめて、淵に陷らざる前に又々別途の極端に走らしむるの覺悟を有して中庸を得せしむべし、個人然り、國家も亦然り、而して多趣多樣多角的は其中庸を生ずるの道とす。

隨感

○女性の嫉妬

嫉妬を女に限れる病と思ひ做せしは、此の文字を作りし此の方、人の惣じて異議せざるところ也。たゞに、男子嘲けつて之を若か言ふのみならず、女性も亦た自から許して之を歎ずるものの如し、豈に太甚しき謬見にはあらずや。試みに問ふべし、男性、嫉妬なき乎と。少こしく、活世界に通じて、繁く庶人と交渉したらんものは、直ちに以て男性に一様執念嫉妬心のあるとを經驗すべし。内閣の交迭より、一事業の競爭に至る迄、惣べて多少、男子が熱烈なる嫉妬心の爲に影響を蒙ふらざるはなき也、强を挫き弱を扶くなど謂はゆる俠骨者流に存外嫉妬深きものあり、人の高名成効を聞かば何となくして之を毀たんとす。所云ゆる强を挫くは即ち强を嫉妬するに陥いらざるもの幾何かある、既にかの任俠の徒にして尙ほ如此し、他の泛々たる男性亦た知るべき耳、女性何すれぞ自から卑しみて獨り此の醜名を負はんとするぞ、男性の嫉妬、多くは功名の爲にし、女性の嫉妬は大率ね情愛の爲にし、女性亦た名の爲にするとあれども仔細に吟味すれば此の名は情愛の故なり。男子亦た情の爲にするとあれども詮ずる所は功業の故なり。功名の爲にすると情愛の爲にすると刺激相異なれども、嫉妬は一なり。もし其の發動の優劣を言はば、寧ろ情愛の爲めにするを高しとせん。何んぞ反つて女性の嫉妬をのみ卑しまんとはするぞ。吾人は男性が女子の嫉妬を誹るを聞く毎に、其面を見て失笑す、公等自己が嫉妬心は如何んぞやと。

○名士の子

名士の子に寧馨兒の尠なきは人の常に奇しむところ也、然れど、名士に好配偶ありて、家庭の敎の善良ならん向には則はち二代相續の秀才あり、よつて以て其の由來を考ふべき哉。所云ゆる名士大抵公務に忙はしく、席暖かならず、團欒濃やかならず、親しく其兒と談話和樂すると太はだ稀なり、名士と云ふと雖ども其感化なきに於ては凡夫と相同じ、安くんぞ之に秀才の相續を要むるとを得んや、但だ賢良の内助ありて

能く其の不足を足すことを得べし。則ち名士の子に能肖の健兒あらば、多くは之を夫人の功に期せざるを得ず。

○難める友よ

人をもて終極の友とすれば寂寥に堪えず。恨思悉皆充たされがたく、只あかぬ思ひのするばかりなり。花片の水に浮んで行方知れず流れゆくを見、月の西山に最と惜しく沈んで我を一人のこすゝら堪へがたきに、若し同心終生の友にして先だつことあらんには、如何んにして能く之を忍ばんとはするぞ。試ろみに汝の所懐に問へ、彼の愛らしの和兒もし瞑目して汝より離れて逝かば如何にと。あゝ人生のもろきこと朝露も啻ならず、會者の相結ぶこと、古びたる繩を縛れるより尙ほ哀れなり。もし無常の與に有常を認め變化流轉の外に一道不生不滅の常住するものを信じて、而して此の大觀念を遍照八射して世界の万法を實在にするにあらねば、多恨多情の士人それ一日も安きを得んや。いぢらしき、淡泊の族よ、屢ば揚言して曰ふらく、吾は厭世を知らずと。厭世を知らざる何の誇りぞ、則ち誇りにあらざれども、其幼ならしき安心こそ可愛ゆけれ。

（三三一）

文字憂患を生み、多情恨思を兆す、涙はらくと落ちて、胸万解のせきあえぬものある輩よ。何んぞ速やかに大安心の觀念を握らざる、其の憂悶多恨を想ひやりては、偏に同情の念禁じがたきものあるぞかし。

○先づ之を愛せよ

現在に慊たらず快々として樂しまざる友よ。生氣八荒に充ち滿ちて枯木尙ほ春は花さくものを、ひとり彼等が純潔の想念に生氣の動かざるは何故ぞ。其の情の寄すべきなきが爲め乎、世上滔々たる不愍の人あり、慈愛して之を懷ふに足るにあらずや、壯んなる有爲の事業なきが爲め乎、世間茫漠たり、經綸の施こすべきもの多し、死を決して敢て爲すの人むしろ尠きを歎ずるにあらずや、戀心の與ふべきなきが爲め乎、嗚呼、於戯、百花亂れて咲くものあり、胡蝶狂ひて飛ぶものあり、月、村雲をあやどり、波濤、なぎさを弄そぶ、之を愛するものは、泥土を尙ほ嘗めべし、枯木も尙ほ抱くべし。愛して而して戀思の寄すべきなしと言ふとなかれ。若し但だ要求して人の我を愛せんことをのみ欲するものあらば、則ち惜むべし。

落花もすげなく袖より飛び、人もつれなく面をたむけんさびしきは、吾先づ愛せざるが故なり。先づ之を愛せよ、愛して而して之を愛せよ、人間遂に心中のにぎやか味を感ぜざるとあらんや。利己は蓋し單獨をきたす、犧牲は即はち隣あるに至る。

○法士の會同

近頃ろ各宗敎界の有志一堂に相會して、懇ごろに問ふに敎話せんと傳ふ、則はち世上忽まち是非の論あり、反目嫉視して之を議するもの尠なからずとぞ。嗚呼、かしましの世なる哉。論議の盡すべき題目それ如此く少なきか、何んぞ拘々然として細事に掛念するとの若かく太甚しきや。凡そ人々の意樂同じからず、念誦祈願する所の淨土天堂は其形を異にすとも、若し眞とに道を講じて其の自得を樂しまんほどのものは、大凡そ同流の士時に相會して清話するは、人世無上の祝福にはあらずや。望むらくは、偏黨小派の僻見をして亦た好道の士の間だに侵入せしめざれ。法士の爲す所は融通自在にして、洒々落々の妙味こそあらまほしけれ。

○彌勒の下生

友人長井行さきに告白して曰く、

一々華中一釋迦と申し候へば又一々華中一彌勒なるべし、實は都兜夜は閻浮の前例もあるとなれば、吾人至誠以て禱りたらんには、下生の期を早め、臨時に出生せらるるを疑ひあるべからず、此くて吾人は其の淨國土、淨一切、護國土護一切の行願成るを樂しむべし、宗教豈吾人の取舍撰擇、補綴製作を容さむや、吾人は唯だ日本を一華一世界と爲し、是處に慈民尊の下生を待つある耳

これ近時秀抜の見地にして、宗敎の信念あつき輩のひとしく同情を寄する所也。某あり冷然として之を嘲ける。蓋し彌勒の宗敎義を誤まれるに因す。凡そ今の宗敎上の論爭なるもの大抵此の類のみ。

○夢に道士と會ふ

夢に道士と會ふ。仙骨夙にかぐはし。審さに示敎をうく、了々として耳底にひそむ。俄然夢さめて孤燈明滅し、現幽の界彷髴たり。尙切りに沈吟す。正に是れ、閭與㆓山僧㆒別、低㆑頭禮㆓白雲㆒の感慨。

敎育

外國人設立の學校

外國通信の齎らす所によれば、佛蘭西外務省次官が代議院に於ける説明に曰く、日本に於ける外國人設立の學校は多く有益の効を奏したり、故に吾佛蘭西政府も亦た佛人が設立せる同國の佛蘭西學校に補助せんことを欲すと。代議院は則ち之を可決したり。

日本に於ける外國人設立の學校とは、即ち世の謂ふ所の宣敎師派學校なるもの是れ也。此派の學校は果して多く有益の効を奏したりや、又、將來進歩増加の傾向に嚮へりや、世人の頗ぶる不審する所ろなるべし。

現在の實際を言はば、此派の學校は總べて逆境に立ち、大率ね衰運に屬す。故に、局外者は稍や度外に置き當局者も多く失意の躰あり。是れ吾人の太はだ遺憾とする所也。

吾人が觀る所を以てするに、此派の學校は其の男女敎育の何れに任ずるに拘はらず、將來彌よ〳〵増加せしめ、隆んに其の規模を振張せしめんことを冀望す。啻に冀望するのみならず、若し善く時勢の需要に應じて、其組織を適當にせば、將來必らずや増加振張すべしと信ずる也。

從來此派の學校に對する世人の註文は眞に夥しきことにてありき。左れど之れを一括して綜合せば、要する所は、之を日本的にせよと言ふに歸着したりき。抑そも、外國の資本と外國の人物とを吾國に歡迎して而して其の行爲を全く『日本的』にせよと註文するは、當然の要求なる乎。よし又純然『日本的』に化し去らば、わざ〳〵之を外來の人に所望すべき必要ありや。**大國の世界觀が要求する所は、世界の各種異色を吸引せんことにあり**。故に、外來の事業にして若し其の外來の別色を發輝するとせば則はち探て吾國の益となすべし、渾然和して初めより純平たる『日本的』たらんとは、寧ろ大國民たるものゝ眞に要求する所にあらざるべし。

且や、此派の學校をして『日本的』たらしめんとの希望は、所々に於て幾度か試みられたり。而も能く成功したるもの何處にありや。汝、黄金を出すべし、亦、敎師を送るべし、其の

使用方は吾々の手にて處置すべしと激論し、此を承引せざれば日本人を信用せざる故と慷慨し罵詈す。凡そ何國の士君子か如此き不當の言掛を贊成するものあらんや。

然れども、如此き慷慨が一種の愛國心より發動するものあるを思惟するときは、些さか愛すべきものなきにあらず。曰く、外國人が外國風に敎育するときは、日本人をして外國人たらしむ、一朝事あるの日、戟を倒さまにするもの誰ぞと。頗ぶる切迫したる論法と云ふべし。

左れど平らかに思ふべし。我國民は果して外國風に化し了すべき人民なる乎。其の模倣に長じ、適用に巧みなるは、殆んど天禀に出づ。寧ろ之を指さして國粹の一つとすべし。然れども、純然化して外國人の如くならんとは、其の未曾て爲さざりし所、古來の歷史に證し得て明らかなり。我國民の爲に憂れひて如此く卑劣なるは寧ろ恥辱に非ずや。

惟ふに將來世界の救濟に意あり、天下の經綸に一分の寄附を獻じて、坤輿共同の大政治に優等の地歩を占めんとする偉大なる抱負ある國民は、世界のあらゆる能力を招きて之を吾が益となすとに心掛けざる可らず。外國人、其の資金と人才とを致して我國に其の事業を成さんとす、是れ豈に孟子の所謂る士民子の如く來るの類に非ずや。招かずして來り働らく、天下如此き良經濟あらんや。

一說に曰く、外國人我國を目して傳道地となさん間は、即ち我國を劣等視する也と。之れ一應の理ありと雖ども全般の通理にあらず。外國の人皆な傳道會社の人たるに非ず、一部の人士が我國を劣等視したりとも、夫が爲めに我國の品位を下すとあらんや。よし又假りに傳道會社の觀念を有力なりとし其傳道地となすの報告は即ち一般をして、我國を劣等視せしむるの所以なりとするも、抑そも之を防ぐに何の處置かある。もし其傳道に妨害を與へ、其の自由に來り働らくに故障を置かば、則ち之れ彌よく彼等をして劣等視せしむる所以也。此に至つて杞憂も其の救濟の手段なかるべし。寧ろ如かず、彼等が傳道師を送ると同時に我よりも亦た傳道師を派遣するに。英米佛獨の諸國と雖ども、互ひに他に其の傳道地を置くに非ずや。

左らば則ち外人設立の學校の爲に何をか憂ふ。吾人が觀る所によれば、益ありて損なし。我國家は、外資の助力によりて

其教育の器關を複雑にすることを得る也。我子弟は僅小の入費によりて洋行同樣の西洋學問を得る也。之れ豈に帝國の公益にはあらずや。

故に吾人は、外國人の設立する學校の彌よ增加せんことを希望し、且つ此等の學校は可成く純乎なる外國風にして、其の主權と監理とを外國教師の手に一任し、凡そ校内には些の日本語と日本風をも見聞せざるに至らんを可なりとするもの也。而して斷乎として信ず、如此き種類の學校は將來必らずや增加すべく亦た隆盛すべしと。

教育家の熱誠　（一）

或人記す。昔某の處に、一人の富豪ありしが、此人世には何不足なき身ながら、望月の欠ぐることなきためしはあらで、我家の富の悉くにだにも代へ難き、一人の愛子の、何の世いかなる酬にかありけん、生れこし此方、病勝ちに弱く、幾年かの齡を積めども、なほ未だ起立することも能はず、また座することも能はず、されば、いつ歩き出でんかなどゝは、夢にも思ひ寄られぬことなりき。此兒居常の態は、たゞ床の上に四肢を張り伸して、偃臥するのみ。如斯くなれば、精神も、氣力も、また薄弱なりければ、身軀こそ是非なけれ、心のみにてもとの望さへなかりき。片輪の子ほど可愛きは親の習ひなればや其父母は如何にもなしてと、心をつくし、手をつくして、この愛兒を養育せしが、いつの頃よりか、一人の熱誠有爲の青年を求めて、其敎育を囑托したり。其青年の教育家はいたく此兒が、不具癡物に等しきを憐憫し、必ずや之を救ひ、之を健かならしめ、會々受け難き人身を受けたるの甲斐あらしめんものをと、心を砕き、思を苦しめ、精神の凝る處、遂に一策を案出して、己もまた此兒と等しく、其傍の床上に偃臥するの態度をなせり。恁くて敎師は、其一腕を杖ついて、僅に其躰を扛ぐることを試みつゝ、之を不具兒に示せば、彼もまた之に眞似て、又其一腕に支へて、其身を起しぬ。之を習ふこと數次、功積みたるの時、此度は敎師座容を取るの擧動を試めば、彼もまた忍耐、勵意し、試みに試みつ、やうやく座容を取り得たり。事爰に至れば敎師が事業は、既に其半ばを終へたり。大なるかな深厚なる同情の力や。此敎師が熱血熱涙を

注げる其行爲は、終にこの不具白痴者をして、起立歩行し能ふまでに至らしめ、健全なる一個の人間として成長せしめたりとぞ。

教育家要する所、實に大なる同情に在り。小兒には、其要求するの同情を寄せ、白痴には、また其の要求するの同情を與ふ。彼一青年が成功の秘決は、如何なる場合にも教育家として有すべきの秘決なり。如何にして、兒童をして、身を立て、家に起し、世に効あらしむべきや、之を思ひ、之に竭くして自ら身を忘れ、家を忘れ、万事を擲ちて、之に奉ずるによりて、兒童の狀態精神境遇に同情を表すると鬱勃たるに非ずんば、教育家よく其業に成効あるを得べけんや。吁彼宗教傳道の事業が、一の生活の道となりて以來、昔熱誠偉大なる傳道者等が、自ら其罪を痛悔するが故に、其身を殺し、其血を流して、世に向つて罪の悔改を宣傳するの所たりし、彼講壇は、年々歳々に、精神を失ひ、靈氣を銷するの、形式的の所禱說教の安息日毎に、それも職掌柄の務として、行はるゝ處となりたるが如くに、マリオン氏が、世にこれはかり高尙且つ尊貴なる事業は、他にあるとなしといへる、少年の智識道德を發達啓闡するの教育が、また一の職業となり果てゝより、彼前聖英物が、肝膽を碎きたる教場は、今や單に生徒に讀書算術を敎へ、脩身を口授し、學問を切賣りにするを日毎の營業として、隨て同情の念に稀薄なる教師が形式的教育の執行場となりぬると、何ぞ痛嘆せざるべけんや。同情もなく熱心もなきに、何の學說といひ、忠君愛國といひ、國家思想といふ。もし人、壯士俳優が、自由大義を唱ふるを笑はゞ、彼教育家先生もまた笑ふべきものに非ずや。吾人は教育家によりて、死したる學說を聞かんヿを欲せず、若し然らば、寧ろ彼書籍に就くの害なきに如かず。吾人はまた彼等よりして、柄になき仁義道德の辯を聞かんヿを好まず。若し然らば、寧ろ、講釋師に就くの優るに如かざるなり。吾人の教育家に就いて、求むる所のものは、其同情に在り、其熱誠に在り、今の世には殊に之を見んヿを望む。

教育家の熱誠　（三）

教育家熱誠の力の偉効や、更に左の實例を擧げて之を證せんとす。

二三十年前の事なりき。米國の一僻地に某と呼べる村落こそは、全村擧りて、道義地に廢れ、人心腐敗を極め、邪淫非德の行ひに沈湎し、天火に殲ぼされたる、ソドム、ゴモラを今にして見るの思ひありけり。一人だに義人の爰に起ることなきに、之を仰ぎ待つのアブラハムもあらざりき。斯りければ其育英敎化の學校と雖も、此混々濁々の渦流中に投ぜられて、校舍は會々以て不正不義の横行を許すの處たりき。されば名を思ひ、自ら清うせんことを思ふの人は、皆此校に近づくことを快とせざりければ、人を敎へ、世を匡すの敎師あることを得ざりき。然るに爰に某師範學校を新に卒業せし、剛毅温厚篤實なる一人の青年敎育家ありけり。自ら身を挺し、奮つて餘人の避けて近づかず、また決して歡迎せられざる彼學校に入りて、敎鞭を取るに至れり。彼は僞りを行はず、飾ることをなさず、率直素樸に、一意專心、先づ内部の改革に着手し、赤心を推して生徒の胸中に措き、同情を以て彼等を動かし、敎師と生徒との間には、禮讓尊敬協心同力の高尚なる念慮を養成維持せしかば、日ならずして、此敎師が熱誠は、學校より出で、移りて家庭に入り、彼と父母との間に同情一致を來たらし、德風清流全村に遍く、延いて、隣里に波及し、平和は傳はり、幸福は滿ちぬ。彼敎師は敢て自ら公衆の注意を惹かんことを覓めて、其業に勵みしものに非ず。名利素より希ふ所に非ず。たゞ其熱誠なる事業は、無言にして、清德の福音を傳ふること、置郵するよりも速に、未だ一年ならずして、曩に人の之を口に上すだに恥づべきことゝせられたる、此村落の名は、名譽榮光を以て、讃へらるゝに至りたりといふ。

ペスタロチーが、其理想を小説に寓して、其腐敗不德を極めたるボンナル村里が、一人の女の熱心を寫したる、一敎師の敎育により、彼が万難千苦を排して、遂に清德閭里に行はれ世界の人民を敎化するの中樞となりたりといへるもの、是れ彼敎育を以て天下の最大事件となし、之を以て万戰万捷に誇れるナポレオンを敎へんとしたる、大人物が此事業の確信を洩す處たり。然り彼がイブルッン、ブルグトルフは、世界文明進歩の車輪を一旋轉したり。彼青年敎育家の成功の如き素より當然疑ひを容るべからざるものにして、同情熱誠なると彼が如きの敎育は、實にさる大業を成就するに餘りありといふべし。今の敎育家、誰か彼が意氣と、彼が精神とを學んで、

彼が如きの功蹟を思ふものぞ。功蹟素より希ふ處ならん、されど之に達せしむるの道に經由せんとに熱中するもの果して幾許人かある。

村學先生

世は日清戰爭の勝利の聲、續々として到るに醉ひし頃、記者恰も故山に在りけるが、同人等と相議し、軍人家族扶助義金募集の計畫をなして、所々に日清戰爭幻燈會を開くとありけり。其折會々某僻村の小學校教員の聘に應じ、予は幻燈器械を携へて、彼等が小學生徒及び其父兄等の爲めに開ける會合に臨みたるとありき。器械を使用するものは、即ち予にて、而して其說明の勞に任ずるものは、即ち其教員先生達なりき。察する處、彼等が元來この會、この前後にも予等同志の中を招いて數次開きたる此種の會を開く所以の目的の大部分は、彼等得意自慢の辯舌を振つて當時天下の耳目を聳動せる大活劇を演述して老幼男女を感服せしめんものと志ざせるが如くなりき。教員諸氏、我は彼を、我は此をと、其說明の面白げなるを爭ひ合ひつ、幽の幕に映ずる每に、交々辨じ立つると、多くは拙辨濁音、而も冗漫、何が何やら來觀はいざ知らず、予には更に解し難きと多く、時には抱腹絕倒に絕えざるの誤謬をなして曉らざるあり。景氣を添へんとては、彼等は破調滅法なる軍歌唱歌を吐鳴ると、偖て〳〵聞き苦しかりき。又其擧動の輕卒なる、これがこの村落にて、尤も重んぜざるべきの位置にあるの人かやと驚きたり。會果て、人散じて後、彼教員等、粗末の酒肴を設つとあり、余もまた其席に列す。酒杯廻ると重なるに從つて、さらにだに輕げなる其舌はいよ〳〵輕々しく動き、時に醜語痴話の耻ぢられずして語り出さるゝとありて、予をして殆ど坐に堪へざらしめ、これがこのあたりの村學育英の運命を左右するの教育家、校長たり訓導たり、准訓導かと思へば、淺ましくも淺ましく、悲しくも悲しかりき。彼等教員なるもの〻、元來の素性を見るに、決して德高く、志厚く、以て其使命の爲めに自任抱負する處あるものと信ずると能はず。師範學校出身者とてはなく、多くは幾許の智識を擁して、生活唯一の方便として之に當るものたるに過ぎず、中には村里に豪富を以て聞ゆるもの〻二男三男が、何の學識もなきに、先生なる名を得て威張らんが爲めか、村長、校長によりて、此職を瀆せるものもあり。其擧動を一見して、直に其淺見陋識、果してこの聖職に堪ふべきものや否なや測定し難きに非らざりき。

これ予が實見したる某僻村の小學教員輩の狀況なり。而して如斯きは、全國村學を通ずるの實況ならずや。其德、其識よく、一村を風靡し、教化するの村夫子を得んと、また難いかな。

村學の官臭

同じ時の事なりき。滯留中、小學校に彼教員等を訪ひたるに、時恰も、登校の頃とて、途中逢ふ處の兒童等、予を見るや、道を傍に除け、姿勢正しく、敬禮し、校内に到るも、兒童等の予を過ぐると、前に同じ。或者はこの狀態を見て、大人なしく禮儀正しく、頗る喜ぶべきの事となさん。然れども予をしては、實に氣の毒さに堪へざらしめたり。其禮容方正なりといふもの、何ぞ知らん、其眞相は、これ村學先生が御役人崇拜の主義を以てするの教育に基くものならんとは。彼等自らの衷心には、御役人も何とも思はぬともあるべし、然れども、彼等は外面上是非とも縣吏、郡吏、村吏に、膝を屈せざるを得ざるなり。殊に學務官は、其尤も畏れざるべからざるもの。彼等は職業上、さる役人輩の歡心を買はざるべからず、これを得るとには、其學校を巡觀せらるゝ際に、生徒が如何にも、行儀よく、禮法正しく、よく教育せられあるものと認めらるゝとを第一の要務とし、滔々たる俗眼の役人はまた之に滿足するものなり。教員者流、必ずしも、如斯きを瞞着眼方便として態と行ふものに非ざらんも、これ職業上の當然の必要として、なされざるべからざるなり。これによりて見れば、極言するに、生徒は乃ち教員が、職業御都合の爲めに教育されつゝあると、恰も商賣人が、店の代物を飾ると一般なりといふべし。生徒が行儀のよろしげなる禮法の正しげなる明らさまにいへば教員が月給位置に差し響くものなるが故に、第一に注意せられ、小兒は少しく正

しき身姿をなしたるものを見れば、頭を下げるの習慣を成せり。之を觀すれば、生徒たるものゝ身も亦愍むべきかな。

◎金儲けと教育

聞說く大阪にては、親其子を喩すに

なにも學者になるのではなし、學校も好い加減にして置かぬさ、何某さん見たやうに理窟つぽくなつて仕方がない。もうそろ〳〵會社か、銀行へでも出て、小遣錢でも取られればならぬ。

さいひ、日々學校に通ひて、孜々勉强せるものを見るごさに、乃ち嘲つて曰く

いつ迄も、大きくなつても學校に通つて居る。

さいふさで。然れごもこれ豈に大阪人のみ然るならんや。知らずや是れ即ち、天下の俗情なるとを。

觀光の米客ポーター我邦工業發達の今日を評して、子弟の教育に及ぶに曰く、

製造工業の繁盛に連れ、學齢の兒童競ふて、錙銖の利に走り、教育を疎にするは、畢竟工業條例の如き制限なきが故なれごも、誠に嘆息すべき次第なり。

さいへるは、却て今日の實狀にして、工業進歩は、實に錙銖の利の爲めに、下等社會の子弟をして、早く學校を止めさせて無智無學ならしむるに終らしむるなり。

米人チャールス、エッチ、パークハルスト近頃論じて曰く

若し予に一人の男兒、其者をば大なる富豪者たらしめんさならば、予は彼をカレヂには入學せしめじ。金儲けは巧計なり、容易に之を獲取するとは、熟練なり。これにはこの特殊の方面に向つて能力を傾注せざるべからず。さ

パークハルストのいふ處は、高等教育の上に在りて、事自から別問題に屬すさ雖も、彼金儲けを第一さし、生活の道に入るを早きを貴ぶ俗情の口實さする處、また之に外ならず。其弊や、高等小學をさへ無用なりさなすの甚だしきに至るものあるなり。

◎教育會の合同運動

一度は恩賜の地所を賣却して、借財を濟さんさしたりさ迄に風說せられて、萎靡今日に極まりたる大日本教育會は、今回國家教育社さ合併し、地方教育會さ氣脈を通じて、大に運動を試みんさすさ。合同成るの日果して、教育界の爲め、幾許の事業を演じ來るかは、吾人之より刮目して見んさする處なり。抑も彼兩教育會なるもの、これまでは、辻、伊澤、加納氏等が、互に割據して、同臭の徒を其配下に集めて、私黨の爭さなすの陣所さして、教育界に除き難き醜事の歷史を留めたるもの。而して今後或は成るべき大教育會さいふものも、亦これ會々以て野望家が、逞勢を張るの處たらずんは幸なり。希くはこれ眞に公益の爲めに、忠實に運動するの教育會たらんとを望む。

教育家が宏大なる教育會を組織して、多數同躰の勢力を以て、教育界の進歩改進の爲めに盡くさんと、尤も望むべきとなりさ雖も、これさ同時に其教育家が、個々別々に、感奮興起、嚴に其使命に任ぜずんはあらす、今の世の欠乏は第一に是也而も團躰の運動さいふものも、後者を待たずんば、眞に分明正大なる活動をなすと能はず、會々以て野望家が私慾を濟さしむるに足らんのみ。

宗教家か其團躰的運動をなすに先たちて、個々の靈性的活動を要す。教育家の團躰運動も亦同樣のプロセスを要せざるべからず。

◎教育界の富む所

私行脩まらざる教育家、筆鋒輕卒なる教育論者、國家主義は即ち政府主義を意味すさ知れる教育家、年功加俸の爲めに働く教育家、確信節操なき教育家、猜疑心深き教育家此等は我教育界の豐饒を致すもの。

◎雜種兒問題

「世界の日本」の汲江堂主人は、兵庫縣師範學校附屬小學校の雜種兒統計によりて、些か雜種兒問題を紹介したり。雜種兒が成育將來、國民さしての價値等は之れ社會上教育上、果たまた慈善事業上頗る重要の問題たるに、學者これに注意するもの甚だ少きは怪むべし。吾人一度び横濱に赴きて、多くの雜種兒を見るき、立派なる父母を有するものは可なり、其然らざるものには、思を惹くと甚だ多し。內地雜居の曉に至ればこの問題は更に研究の必要を促かさんさす。其研究

○米國通信

左はケムブリッヂ府ローレンスホールにて七月四日獨立紀念祭の日認められたる大須賀亮一君の音信なり。私信ながら白痴に關して有益の說多ければ遂に公けにす。

小生事去る廿六日此地に着任候小生こともニューヨークにて暑氣に惱まされ健康を害ひしより今以て復舊仕らず困却致候此地の飲料水甚だ不良に候これを用ひ候時は必ず二三回下痢を催し候故今はノブスコット山の泉水を一斗程買ひ求め之れにて渴を凌ぎ居候當神學校には坂井氏在學中にて候へとも氏はメインへ避暑に參られ五島博士にも一昨日出發歸途につかれ候故今は別に訪ふ人も無しただ獨り當館に宿泊致し食事はハーヴァードの食堂にて致し候聊なくして配所の月をながむるとは小生目下の境遇をしも申すことにて候はんか

當地は學問を致すに至極適當の處に候殊に夏分は暑氣非常に甚しく候尤學生も四方に相散じ至極閑靜に候ハーヴァードの圖書を使用相出來候樣相成り候ひし故今日まで如何にさがしても求むることを得ざりし書籍も悉く得られ甚だ便益を感じ候殊に米第一と稱せられ候有名なるフアーナード氏の白痴學校も滊車にて僅に十分程て參られ候故研究には充分よきところに有之候

白痴教育が今日の如くに進歩したるは實にセグヰン氏四十六年間の忍耐熱心によることと存お今や氏の著書は絕版に相成候を氏の未亡人に書面を出し漸く一册を得候も他の書は之を求むることを得す止を得ずハーヴァードの圖書館にて寫し居候氏は死に至るまで白痴教育のことを念頭に措き須臾も忘れず其熱心實に感ずるに餘りあり候ミセスセグヰン氏は我良人と幽明處を異にするの不幸に遭遇する一兩日間にあるべきを察し此一兩日間學校を閉ぢ思ふまゝの看護をも致さんと此事を氏に申出でしに氏は之に答へて

With all his energy he cried: "No, no! Never loosen your hold on the child for one hour. This is of the first importance,"

These words, almost the last he uttered, I have never forgotten.

これミセスセグヰンが涙と共に世に公にせし氏に關する記事中の一節に候それより今日まで獨力以て良人の遺志を繼けニユーゼヤーシー洲の一寒村に僅かの子供を相手に獻身的の生活を送り居られ候其洲立ならざるが故に其規模の小なるが故に人多くはこれを知らず然も其規模の小なるは其人の殊更に少なきはこれ故セグヰン氏考にある處に有之其結果實に他に其比を見ず候ニユーヨークの監督ボッター早くもこれを知り左の書を送られしとぞ

Dear Madam,

I know of your work from testimonise of those whose children have been your pupils, and am glad to express my confidense that for the delicate and difficult task you have undertaken, you have peculiar and preminient qualifications, and I am,

dear Madam

Potter.

ミセスセグヰンは嘸ぞや其知己を得たるを喜び玉ひしならんと我ながら嬉さに堪へず候其容貌と云ひ擧動と云ひ人か獸か判別致し難き族のものも有全く骨なきが如くしてクラゲ然たるものや或は無感覺無神經にして地藏の如く不動の如く立てば立ちたるまゝ坐せば坐したるまゝのものありこれらを一々撫育教導致すに中々一時の義俠心など好意心などにて出來得べきものに無之眞實神の愛し玉ふ同胞の一人なることを深く心に銘したるもの始めて之を教導し得ることを今更の如く相感じ申候

實に留へば立て立ては歩めと希望するは親たるものゝ至情然るに相當の年齡に相達して他の子供等は普通の學校に通ふ時にも學に就くことを得ざるは勿論のこと立つことだに能はず歩むことだに語ることだに能はざる子供等の不幸と其親たるものゝ悲は如何に候はん我子の行末を案じ煩ひ白痴學校の教師を最後の力とも賴み痴兒を相携へて入學を申込に來り候其母に遇ひ候時は腸もちぎるゝ心地致し我汝と生國を異にするも又汝に對し何をもなし得るの力なしと雖も我深く汝の心を察し切實なる同情の念を有することを汝の知らざるを好まずと中度を制して暗涙に咽びつゝ相別れ候も實に苦く候實に此國にて白痴數の增加の速かなる驚くの外なく候

フアーリーボルドより兩三日前書面參り候ひしが彼地白痴學校の小供等皆小生を待居候由又小生歸朝後の事業を助けんとの考へにて小生に尤親かりし女子部の一組發起と相成りアイスクームを製し幾多の客を招待してこれを賣り付け其收入を

小生に送り候由これを聞き男子部の音樂隊にても音樂會を開き其收入を同樣の目的にて女子部の收入に加はへし由斯くも他の不幸を憐む同情の念の發達せしまでの教師諸氏の辛勞それ幾何なるやを知らず候

此地に二ヶ月滯在致しハーヴアードの圖書の白痴教育に關する分を一通り相調べそれよりニューヨーク發府、エルウ井ン、ヴアインランド等を經て十月下旬か十一月上旬にフアリーボードに歸る積に候孤女院の知己は重にヴアルヂニヤ近傍に候も旅費多くかゝり候爲め彼地には參られ不申不得已其儘にして歸る積に御座候

心淋しきときはブルツクス氏の墓に詣でこゝにて沈思默禱をなし又氏の說教集を繙き候こさを此上なき樂と致居候幅二尺高三尺にも足らざる墓表の下に靜に眠れる氏の傍に跪き候時は一種云ふ可らざるの慰めを得申候スパルタに一小年あり戰に望むに劍を乞ふ而して父か與へし劍の短なるをつぶやく父曰く汝の劍若し短ならば汝の一步を進めて之を長くせよとこれ民友社の某書にて記臆せし一話に候がブルツクスの傍に參り候時常に此一話に心に浮び候彼が如きの信彼が如きの德なく候も彼よりも一層多く祈り彼よりも一層多く働き彼よりも一層修養鍛練致候はん神の器として彼と我との差に今日の如くに相異ることは無之候べきにと種々の感に心を打たれ候此地に參りしを一新紀元として一層の修養を可致候「犧牲獻身の樂」「如何にせば犧性は進步すべきや」氏が此二說教繰返す每に新に相感じ申し候

七月四日

尙ホールはロングフエルロー氏居宅の隣家に有之候が有名なる詩「田舍の鍛冶」も近所に其跡有之候其他ローレル、ホルム、チヤンニング、アガシス等の居宅や墓地皆此近所に候

此近所よりボストンにかけブルツクス氏を慕ふこと實に甚しく每家必らず氏の肖像を壁間にかけ又氏が葬式の時など各派の教會皆哀憐の鐘を打鳴らし商店は店を閉ぢ候ひしと云ふ

古がはら落ちて苔むす草むらに
こゝろながくもすめる月かな

蓮月

觀勢

偏狹國家主義の反動

國家主義なるもの唱道されてより、茲に年あり、政治に經濟に、文學に美術に、將又、宗教に道德に、其影響する所尠なからずとせず、明治二十年の頃は、宗教と國家との關係論續出し、基督教と國民主義、基督教と國家等の論題、諸方に散見したり、宗教々教衝突論一時教界を騷がしてより、國家教育と基督教の關係頗る世の耳目を惹きたり、是れ皆な世人の熟知する所とす、國家主義論の盛んなる、如何なる影響を及ぼしたるか、仔細に之を列擧することは他日に讓り、唯吾人は我國の宗教、道德、教育、政治論壇には、實に著大なる影響を與へたりと云はんのみ何事も國家主義、國家思想に限らんとするは、滔々たる勢流なり、眼あるもの直ちに之を認むることを得べし、國家教育、國家倫理、國家宗教、日本的宗教、日本倫理學等、樣々の名稱の下に國家主義を鼓吹したり、又鼓吹しつゝあり、一派の人は絕へず之に對して批評を試みつゝ、來りしものあるも、此一二年來、特に日清戰爭の開かれてより國家主義鼓吹者の多きことは、事實爭ふべからず、然れども開戰以後の思想は、前年に比して大に進步したるものあるを見る、蓋し國民力量の自覺心より發し來りしものあればなり、前年の如く歐化主義を蛇蝎視し、洋風に反動して血氣に驅られしものとは、同一視すべからず、

吾人の見によれば、彼の個人主義といひ、國家主義といひ世界主義といふもの、何れも偏僻すれば害あり、極端には眞理なし、冷血利己主義、偏狹の國家主義、漠然たる世界主義、共に均しく固執すべからず、若し夫れ民衆が一極面に偏向する勢流あらんか、經世家は別途の極端を携へ來りて之を民衆に示さゞるべからず、孔子が積極的道德組織の衆愚に誤解せらるゝや、老子は消極的に出でたり、波羅門の階級制度、漸く弊を來すや釋尊は平等觀を立てたり、されば廉恥なく恭儉なき、冷血的利己に偏向する傾向あらんか、之に對して世界主義を唱ふるも可なり、

要は時勢を達觀して應病與藥の策を爲すへきのみ、世若し、個人、國家、世界といふ如き特一の主義論をもて人生社會を經理し得べしと信ずるものあらば、そは天下最上の愚物ならん。未た一身の衣食住を支持し得さる弱輩、國家の爲めに死すといふ、何の業ぞ、先つ同胞の爲めに血を流すの機根なくして、誰か亞弗利加の黑奴間に傳道し得るものぞ、自國の爲めに計るとをせずして、誰か外人の犧牲となるの愛情あるとなす、未だ兄弟を愛せさるもの、他人を愛すとは背情の極なり、國家の爲めに死するの氣慨あるもの能く世界の爲めに死するとを得、世界の爲めに死する人にして、國家を土泥の中に委せんとするもの吾人未た之を見ず、近來の偏狹の國家主義は、學理と人情とより打算して「スターツ」「ナチオナリテート」を保持し之を進歩せしむるものにあらで、九分九厘は「政府主義」なり、然るに世人未た時代の精神の何處にあるやを辨せずして、漫に之に雷同附和し、其弊滔々救ふべからさるに至らしむ、爰に於て乎反動の聲聞えずして止まんや。

『世界の日本』紙上、清野勉氏は、

批評的眼孔

と題して、偏頗なる國家主義の害を論ぜり、先づ明治廿一二年頃迄は、日本の經世論者は、一にも二にも世界を標準に置きたりしと說き

數年以降更らに此反動の反動として經世論者は偏重の國家主義を懷抱し、如何なる事項も此偏重國家主義の眼光の下に照し見るより、知らず識らずして世界の大勢に激抗し、之が進運に扞格して我が邦家の利害休戚を論議し、又之を措置するの傾向あるは歷々掩ふべからざるものなり、夫れ今日の日本は昔日の日本と異なり、其國力大に增進し、隨て其一動一擧は世界の痛痒と影響するものあり、是こを以て各國皆其擧動に注目すると頗る大なり、其大に注目さるゝ所以は卽ち其國光を增す所以なりと雖も、邦家の事益す多からんとするは自今以後決して避くべからず、

此の多事複雜の間に處し、世の政治家たるもの偏執の主義を懷抱し、獨斷的見解もて邦家經綸の大策を立てんとす其偏執獨斷的之を名つけて國家主義と言はゞ云へ、其名目の美恰も錦の御旗に似たりと雖も、偏重の國家主義は實際全く邦家內外の經綸に益する所なく美名の下に知らず識らず、人心は欺瞞せられ、無形の國家は度外に附せられ、獨り有形なる行政府の威權を增加することゝあるのみ、政府威の增加は一般人心を腐敗せしめ、議會を奴隷視し、其の弊害の及ぶ處終に底止する處を知らざるものあり。古來東西の史乘は吾人に敎ゆるに檀制政治の國家の元氣を委靡し、社會の活動を底止し、之をして千載不進の境遇に陷落せしむるの事實を以てするにあらずや。而して此の如きものは何ぞや、檀制政治は取りも直さず偏重なる國家主義を以て立脚地盤とする所の政治なればなり（『世界の日本』第三號）

されば批評的眼孔もて日本の百事を分析し、又批評的眼孔もて世界の氣運を達觀し、之を損益して日本の富强文明を補裨すべしと論せり、

『世界の日本』記者は其社說に於て

大國民の理想

を論じ、日本國民は羅馬國民の如くなるべしと說きて曰く、

國民主義を唱へんと欲せば唱ふべし。唯だ偏狹固陋の極端まで國民主義を推し進むることを日本人をして世界の舞臺に飛揚せしめんとするとは、全然相反の意義を含めるを忘る可らず若し偏狹なる國民主義を實行し、世界の文物、血液、勢力を拒絕して、猶ほ且つ日本をして世界の舞臺に飛揚せしむべしと云はゞ、是れ謬見のみ虛僞のみ大言世を欺かんと欲するものなり

汝の文明を固執せよ、汝の風俗を固執せよ、汝の道德は天下の最良道德なり。而して世界の潮流に化せらるゝなかれ。世界の潮流を拒絕せよ去らば大國民たらんと。天下の背理。虛僞是より甚だしはあらず（『世界の日本』第三號）

又『國民の友』記者は、其社說に於て

文明の權利

と題して論じたるものあり、

我等は世界に於て自尊的政畧を取る可き乎。世界の利益を犧牲として國家の自大なのみ圖る可き乎。世界を獸力の競爭とのみ見做して自國を大なる獸力と爲すことにのみ勉む可き乎。若しくはすべて世界的利益より打算し世界的良心、世界的正義の權化として自ら居り此の國を擧けて世界の文明に寄與するの覺悟を爲すべき乎。一言にして曰へば世界歷史の潮流に乘じて文明の擁護者たるべき乎。

斯の如き問題は單に抽象的の夢想に過ぎずと云ふ者よ、是れ焦眉の大問題なり。

國民を煽動して自大的根性を養はしむ可きか。若しくは正發の感念を高めしむ可きかは、直ちに國民の精神的教育に關する大問題なり。直ちに小學校の讀本にすら顯はれ來る可き問題なり。總べての現象は一根に出づ、此問題にして明かに決せらるゝに非らずんば吾人は臺灣統治の方針を定むる能はざるべく、朝鮮に對する政略を定むる能はざるなり。掠奪乎、文明の爲め乎、呑噬の爲め乎、自衛乎、是れ吾人が世界の舞臺に演ず可き戯曲の目錄を定むる者也、(『護教第二百六十五號)

偏狹なる國家主義に反對する聲、此外にも多少見ゆれども、爰には略す、斯の如き反動と共に、世界的智識の必要を叫び、日本の價値如何を論ずるものあり、小松綠氏は、

日本の眞價

と題して、先づ物質事業に就て、歐米に劣るの事跡を列擧し、更に歩を進めて云く

「所謂加藤の哲理の如き、彼を摘み之を採り剽竊多端、畢竟泰西先哲の糟粕を綴りたるもの、其自から見て先哲未發の創見となすものは大概僻曲窮屈固より意見卓識マクス、ノルトー或はベンジヤミン、キツドの滂沛として拘滯の病なきが如くならず。北里の肺療に於ける奇を好む米國の新聞は彼を招いて直ちに百萬の患者を救治せしむ可しとの戯言を吐きたることあれども、是に由て直に北米、一人の眞醫なしと速斷するは妄なり。其細菌學に精通せる、多とするに足るは勿論なりと雖も、生產界あらゆる疾病は皆悉く細菌に濫源するの學理は誰れ知らぬものもなき文明の今日に在つては極めて珍らしき程の事には非ざるなり。且つ夫れ今の我邦には發明に於てモールス或はエヂソンに攀附する程の偉才なきは勿論、學理に於てチンダル。ハツクスレー一蹕に企及するの人物すら出でざるに非らずや

由是觀之、物質界に於ても智識界に於ても、今日の我國に其實力上無念ながら彼れ碧眼族に一歩も二歩も或は數步も讓らざるを得ざるは、如何に比陰掩飾すとも所詮枉ぐべからざるの事實なるを奈何せん。時人若し衷心慚愧克く斯族の事實を肝に銘し骨に刻み、造次も顚沛にも忘失することなく更に箴規、切劘奮興、激勵して須臾も輟む時なくんは、豈に獨り歐米列國と對等の實力に到達するのみならんや、又應さに彼等を凌駕して或は與邦の盟主たるにも至るべき歟(『世界の日本』第二號)

と、內村鑑三氏が『國民の友』夏期附錄に載せたる『時勢の觀察』に至りては、特に烈しきものあり、氏が最後の結言に云く、

敍し來り敍し去れば、日本の誇るべき者は何物か、吾人の有するものにして世界の有せざるものあるなく、吾人の有せざる者にして世界の有するもの多し、日本は猶太印度の如く大宗教を世界に供せず、日本は希臘の如く大文學を有せず、日本は羅馬の如き大法典を編みしをなし、日本は西班牙の如き大探見家を生まず、日本は和蘭の如く人權自由の爲めに戰はず、日本は白露の如き高山を有せず、日本に露西亞の如き大平原なし、嗚呼吾人は何を以てか誇らん、東山の美妓を以てか、東海の八方美人を以てか。

世人之を評して、極端なる世界主義なりと雖も、事實の眞相なれば止むを得ず、同情を表さゞるを得ずとて、其說を賛成するもの多し、又之を以て進步的潮勢となし、前年の歐化主義、今や世界的智識の變名を以て來れりと爲すものあり、偏狹者流省みる所ありて可なり

雜錄

畫仙草雲子

如雲生

足利蓮岱書房に世を隱れて、二十年、人と相忘れんとするに、人之を忘れず。四時開かざる柴の戶を叩きて、之を驚かすもの少なしとせず。主人ことし八十二、妻子夙に失せ、朋友皆な逝けども獨り健在、矍鑠として意氣毫も衰ろへず。熱血老

覆を破つて迸ばしり、屢々客の膽をして寒からしむ。主人昂然として曰く、

畫道に達するは、英雄の資ありて初めて能くすべし、精神柔弱の徒の企及する所にあらず。

德川氏にあつては、探幽と文晁とを推さん。文晁は正に是れ集大成の人也。

某と某との畫は相ひ匹敵すべし、優劣なきが如し、而も、某には戰爭が出來れども、某には戰爭が出來ず、これ其の相違なり。

富士を畫くには、其山巓を難しとす。雲は倘ほ易し。人物には手足を至難とす。名人の畫には、人物の手足思ひ切つて大きくせらる。平凡者の倣ふ能はざる所也。

山水を畫くは、詩を作るが如し。結構布置、すべて詩情より發動す。

人家は是れ山水畫圖中の眼目なり。其の位置極めて大切なり。たとひ畫中に見へざるとも、凡そ道路なかるべき邊に人家あらん樣なし。正に是れ畫家用心の處也。

飛瀑の落るも亦た然り、必らずや其の泉源らしきもの、隱見の中に無るべからず。

初めは只だ連りに畫きたれども、五十歲の頃、忽然悟る所あり、畫禪の工夫を學べり。

禪書も彼此讀みたれども、何を讀みたるかを忘れたり。喩へば藥の如きものゆゑ、其の當時の用に立てば夫にて十分なりと思ひ居る也。

心手妙會の處に至らねば、名畫は作しがたし。但だ此の自得今に至るも倘ほ及びがたきを憾む。

花卉草木皆な各自の稟性あり、仔細に之を吟味研究し、先づ其正形を寫し、正躰を暗らんじたる後にあらねば、粗畫と雖ども揮ひがたし。變は只だ正を知るものゝ能く爲す所也。

文晁には二回會ひたり、いつも酒を被ぶり泥醉して分らぬ事を言ひ、丸を畫きなどして、ナニ畫書きに成れるものかなど罵しるを聞きたる耳。乍然、其畫は其人物なり。文晁の如き人物は何とも申さんやうなし。

近頃の畫人に此と言ひて推すべきなし、大抵皆な同じ樣なるもの也。

膺擧の爲せし處は反つて容易なり。

○詩仙の天眞

古人詩仙の句を朗唱して、錦腸玉心の感動せる所に觸れては、其の美を歌ふ所、其の情にむせぶ所、其笑ふ所ろ、其の醉ふ所ろ、すべて是れ今人の涙を催ふさゞるはなし。嗚呼、詩人飾らざるの天眞や、すべて吾輩をして泣かしむ。朗吟三四、聲則はち潤ふとを休めず。

雨窓漫唫

嵐のなごり

曲浦生

名も懐しき二百十日の夜嵐、風伯怒り、雲師馳り、雨師荒み、山神叫び、海若激す。徹宵夢枕頭に靜ならず。此夜、諸國山潰え、河溢れ、海湧くと幾許。民の家破れ、稻田海となり、人畜傷つくと幾許。恐れ憂へて、日を經る二三、新紙齎し來るの慘報頗る多く、悚然として天災の頻來に畏戒す。

曉霧海面を包みて、餘怒なほ汀に激す。某の君が忘れ形見の愛子二人の手を携へて、荒浪の打あげ殘せし、ほうづきを拾はんといふに任せて、われ濱邊に下りたつ。權兵衛ほうづきよ、長刀ほうづきよ、何ほうづきよ、此處よ彼處よと、有るまゝに、見付くるまゝに、拾ひ上げしも澤に、嘻々として打笑む幼兒が喜や限りなし。彼等は昨夜の嵐に謝するもの、如し。我宿に歸りて、之を示して人に誇りたるの後は、ほうづきまた棄てられて、用なく、あたら庭に散れり。

海士が子よ、里の女よ、汀に今何をかあさる。ほうづきも拾はん、幾許の代にせんとてなり。其籠に滿てるは、何處の陸よりか、何處の海よりか流れ寄せし枯木よ藻草よ、朝餐、夕餐を炊がん料にとてなり。彼等も昨夜の嵐の謝するもの、如し。夫は海上一葉の漁舟に身を托し、家は濱の眞砂の上に立つ。風怒り海激すると、尤も憂へ、尤も怖る。されど嵐の後に、彼遺利あることは未だ曾て忘れざるなり。

浦わの朝霧（今樣）

浦輪の波も　島山も
　一ツにこめて　きりたちて
汀志づかに　よせかへる
　音のみ志るき　片を波

霧のまよひの　いやさきに
　晴れゆくかたや　朝日かげ
光りもうすく　白金の
　いろにたゞよふ　波の上

ゆきかふ小舟　いさり舟
　沖邊の數の　まさりつゝ
淡路も陸も　のこりなく
　晴れつるあとの　苫の露

天災頻りに到る

天公何の憤る所ぞ、黎民何の罪ぞ、災害並び到り、地上安き思ひもなし。曩に海嘯、百里の海岸に襲つて、人畜亡ぶるもの算なく、慄然たる慘報、未だ全く耳朶を去らざるに、既に北に地震震ひ、西に河水溢れ、所在諸國天災到る處に下りて、民の家潰破し、蒼生慘死するもの太だ多し。若し長胤をして現世に生れしめなば、大原山の方丈に、如何にか感ずべき。季候の變更、天象の激動、畢竟人力の奈何ともなし能ふ處に非ず。然れども、聖人の迅雷風烈には危坐し、身を以て旱天に訴ふるの心掛こそは、天象無意の教に傾耳して、謹て益を請ひ、達心真識を修養するの大用意を籠めたれ。夫れ梧桐一葉、風に亂れて、天下の秋を知るは、人心其蕭殺の寂しさを感ずるによる。若しそれ自ら反思すると深切なれば、花卉を植ゑ、竹樹を栽ること、學教なほ其中に在りといふ。況んや地潰え、海湧き、河溢れ、桑海一夜の暴變、寅然として、教を受くる處なからんや。業にしては、變に備ふるのことあり、心にしては、恒に安んずるものあらしめんとするは、天災の催促する處ならずや。

天災頻りに到る、今日も劇雨、何處の國かまた之を蒙らんも知れず。思へば我も人も安からず。此時に處して冀くは其戒嚴に

きかん。また望むらくは今に當つて、古聖人の用意を以て、治績如何と顧りみ、身を以て天に祈るの治者あらんことを。

心こそ神聖なれ

事業其者が怎生に高尙神聖なりとしても、之に任ずる人心の若し之に叶はずんば、其高尙神聖は損せらる。敎育の事業は高貴なり、されど誠心なき敎育者に逢ひては、乃ち世を詐るの便りとなる。宗敎の事業は神聖なり、されど敬虔ならざる宗敎家に用ゐられては、會々其非を遂ぐるの具となる。聖人仁義を說きて天下の民を敎ふれば、盜跖も亦仁義を唱へて人を賊ふ。故に事業の價値は之に任ずるものゝ價値にあり。されば尤も賤き事業と雖も、尤も高尙なる精神を以て之に處らば、其事業は頗る高尙にして、以て人を敎へ、世を益するに足る、吁何ぞ事業の高等ならさるを憂へんや、たゞ憂ふべし、精神の高尙ならざるとを。

若し時處位の宜しきに處して、神聖尊貴の容貌あるを羨まば、先づ彼より其高位高官を奪ひ、其美服美食を去りて之を見よ。されば彼が神聖尊貴の多分は、忽ちに剝落して、凡人と何ぞ擇ばんや。時處位に處せずしてよく神聖尊貴なるもの眞に羨むべく、これ實に學ぶべし。ルーサウ、幼童に圖畫を敎ふるの說に、幾度となく同一の形を畫かしめ、其最初に成りて尤も拙劣なるものには、金緣を附け、段々と上手になるに從つて、額緣を下等にし、其尤も巧妙なるものには、白木を以てすべしといへるは、其志の存する處甚だ味ふべし。

やさしさ

田村麿一度び憤れば鬼神を恐れしむと雖も、また一たび笑めば、小兒も馴れて親しむと。眞に雄き者には、眞に、やさしき處多し、英雄涙多きは即ち此所以なり。何程腹立たしく、拳を打上げて、あたりの物を打碎きでもせずば、氣が濟まぬといふ時にても、愛らしき緣り兒が、嫣然一笑するに逢へば、俄に顏色を和けで、あひまろひたし。盜賊が兇刄を棄て幼兒の寢顏に、其愛らしきを愛でたりといふ話もあり。人間がこのやさしきの情を失はざるときは、彼は決して全く獸界までは墮落せず。

月影深く水中に沈んで相抱く

洞爺湖畔孤兒院　伊藤保三

あなうるはしの景色や、何處も變らぬ、朦朧たる月の、洞爺の湖の、波おだやかなるに輝きつゝ、黒く裸躰に顯れたる中島の園たるものに對して、無情に云ひ放てるが如き有樣、湖畔の綠樹は參差として、圖畫の如く奇麗にかざられたる天國の門の如し。天地沈々、山川靜かに眠り、四隣寂として纇聲絶へ、万家遠し、神氣漸く澄みて心腸頓に洗滌せらる。即ち靜遠たる湖畔を眺むれば、雪の白き膚に薄黒くも、ぬつといぢらしく立ちたる木の影の、今夜の景色に一層の美をそふるが如く思はれぬ。費間に兒童の歩みし足痕は順序正しく月影に響く。

我を向へ顏なる有珠山は、自から蛇の舌の如き氣焔を腹中にひそめつゝ、さる顏もせで、斑なる雲と共に月を笑ふさまは如何につれなきことよ。獨り寂として堅なき美露館禮拜室に、遙かに鳴く小猫を聞けば、ものゝ哀れも一しほぞかし。「おんこ」といふ木のくねりまがりたる枝は、垂れたるを皚々たる六花と諸共に水鏡に映じ、甘露の如き滴々氷結してきらくと月に對する美くしさよ。漸く感ずるさむき風、ふと見て思ひ起す水面の美鏡に、いづこのやんごとなき君のいたづらか枯葉一ッ二ッ。

幾何かの金剛石の如き白點を、穹蒼に染出し、月に伴ふ星の三ッ四ッ五ッ。我身は如何に此自然に對して思へば思へばつらきことよ、かなしきことよ。我を笑ひ顏なる月は何ぞ我に同情をもたざる、友を懷へば零落の人、親を思へば遠境にあり、我は恨みつゝ死に行く動物なるか。あゝ月汝靈あらば我に何をか教ふべき、西行雜好いづくに、チルヅチルス、ロングフェローいづくに。美はしき牽牛織女が目は、余の目とれらみあひぬ。光りつゝ余を恨みつゝ身は既に仙境の人。

月よそも汝は何物ぞや、或時は故郷なる三笠山を思はしめ、最愛の佳人を懷はしめ、薄命の才子を喞たしめ、恨ましめ、汝を見て暗涙せざるものやある。汝は高し遠し、東より出で西に歸るも我は蜉蝣の短き此命、汝と我と何の關係かあらん。余は美妙の才なく透谷が想なし汝と我との玉の緒は何を以てつなぎとめんか。波を收めて九尋の底に情を蒐めたる洞爺の湖は、玲瓏たる月に映じて、月影深く水中に沈んで相抱く。時に軟風瀟々感交々至る。

時文

○開國先登 提督彼理

米山梅吉著　博文館發兌　定價金貳拾錢

吾人曾て彼理提督が『日本遠征記』の大著を一讀したる時、其琉球、日本に於て見聞したる風俗習慣より、彼等の目にはなほ新奇なりし人民の使用せる器具、及び其初めて來着したる國土の魚介に至るまで、いやしくも彼等が目に映ぜしものは、悉く錄載せられ、一々鮮明美麗なる繪圖に留められ、また安倍川渡しの錦繪までも、書中の記事を飾れるを見て、彼未開頑迷なる當年の我邦を相手に外交術策に遑まなかりし時に當りて、餘力の研究探知、よく如斯きを得たるに驚き、未だ彼理一生の傳記と開國先登遠征記事とを讀まずして、既に彼偉人初の如何に偉大にして、鎖國の夢未だ醒めざる我邦をして、世界文明の潮流中に誘ひ來るの其大任に、能く堪へたりしか、其遠征の如何に尋常一般の冒險家を學ぶものに非らざりしかを知れり。

開國當年の史料の邦文に成れるもの甚だ多し。然れども其多分はこれ邦人の目に見えたる開國の歷史なり。大統領ジョン、クインシー、アダムスが

『人間社會の福利を維持するが爲めには、何れの國民も其が拷を否むの權利あるとなし。日本を開くは、基督教國の義務にして、日本亦た宜しく之に應ぜざるべからず。（本書二十頁）

と叫びたる其精神を奉じて、多衆の難言を排して、蹶然立ちて彼大使命に任じたる、甲比丹彼理が、陸には志士壯客、議論横議して、鎖國攘夷の説囂々、柳營三百年の大業、今將に覆へらんとしたる際、海には國命を辱めらざる星使となりて數隻の大船を擁して、決然成功を見ずんば歸ざるの意氣によりて、着々其健腕鬪頂の外交に綽々の餘地ありし其歷史は、吾人の甚だ聞かんことを欲する處にあらずや。今米山氏が『提督彼理』の著ある、正にこの希望の幾分を滿たすに足りて、吾人は之が上梓を歡迎するものなり。

『提督彼理』は著者が專ら米國政府の藏書に係り、彼理の復命書を博士グリフ井ス

の彼理傳さに基きて、編纂したるものさいふ。其上編は開國談を、下編は彼理傳を記す。其開國談によりては鎖國餘弊さいへ、今なほ外交に拙劣なる國民が、一代以前の祖先が、平和の友情を以て來國したる黑船の爲に、周章狼狽を極めしもの、如何に外人の目に映ぜしかの一端を窺ひ、また彼よりは日淸文明の器械を贈致して、其不思議の業に、邦人の目を驚かし、我は之に對するに僅に力士小柳が角力の技によりて、彼の一笑を買ひしのみなるに痛恨し、また彼理が飽まで平和の主義を持して、屢々なる我の無禮に忍び、殊に志士吉田松陰の爲めに、万斛の涙を吞みつゝ、兩國の平和を思ひて、彼が乘艦を否みつ、心を盡くして彼が罪を救はんさしたるには、また讀者の袖を絞らしめ、旰我開國の先登、實にこの平和の偉人彼理なりしとを感謝せしむるに足れり。

下編彼理傳記述する處吾人をしてこの偉人物が、開國恩人たる素因實に深かりしを知るべし。その秀俊剛邁、父祖さ共に、身を國命に許し、亞弗利加殖民より、墨西哥戰爭より、蒸滊軍艦の發明より、遂に日本開國の大使命を果たすまで、此人英邁、歷史は不朽に彼が名を傳へざるべからず、日本國永く彼が名さ其恩さを記せざるべからざるを知らしむるに足る。著者いふ、其心竊に彼理の巨像が横濱灣頭に建立せらるゝの日あらんを望むさ、吾人は更に望むらくは、彼さ井伊直弼さの大像、横濱灣口を擁し、海に向つて建立せられんことを。

此書文章明快近頃快讀すべきの良著たるに誤まらず。素より之を一篇完全なる史乘さしては甚だ不滿足なるとは正に著者自ら辯ずるが如し。然れど江湖はこれを歡迎して以て平和熱誠なる英雄の遺風を欣するを得ん。

日本美術全書沿革門

末松謙澄譯
八尾藏版

英人博士アンデルソン氏、曩に久しく醫術を以て我海軍省に聘用されし際、其得意の美術眼を以て日本美術を研究し、其著日本繪畫術は既に明治二十年に於て出板せられたり。此書の成るや末松博士與りて大に力ありしさいへるに、今は亦博士此書の飜譯を企て、公事忙々の間に。容易ならざる勞力さ尠少ならざる費用さを投じ百事を拋て、以て鋭意其完成を期しつゝ、太陽及び我女學雜誌本年第一月刊行分にも、其分編を示されしが、今回其既成の沿革門を上梓し、『名けて日本美術全書沿革門』さいふ。記述詳細而して又博士の之を譯する、邦人をして解し易からしめんが爲めに、補ふ處多し。蓋し尋常一般の輕々しき飜譯には非らざる也、日本美術界の爲め博士が此擧たる、甚だ多さすべきなり。製本美麗、美術書たるに恥ぢず。卷中挿む處の畵版總數八十有余。寫眞銅版あり、木版あり、其寫眞版、西洋本版の如きは、鮮明を欠き不出來の嫌なき能はず、挿畵には今一應の精巧を積まれたしさの希望ありさ雖も、先づ概して美麗に、容易ならぬ出版書なりさいふべし。

吾人は强て此書の後篇即ち應用編の速に出版せられん事を望む、博士冀くは其勇氣の初志を繼續せよ、聞説く博士頃は病ありさ、自愛せよ。

小學遊戲敎授書

近藤直次郎編述
同文館發兌
定價三十六錢

兒童の躰育を柔軟兵式等の躰操にのみ托すべきにあらずして、また趣味快樂多き遊戲を要するを甚しく、而も其躰育上効能は無乃後者に多しさなすも不可なきなり。近藤氏著す處のこの遊戲書、小學校の各年級に應じて、夫れ〳〵の遊戲を設け、其遊戲中に唱歌を加へて興を助け、また偏ら樣々の智識を養ふの便をなせり。之を實行應用するに於て多く稗益する處あらん。

普通裁縫書

錦織竹香女史著
同文館發兌
全部定價六十五錢

本書は著者が十數年來師範學校及び附屬小學校等にて、該學科敎授中の實驗さ工夫さに基き且つ府縣の敎授法を參酌して編述したるものさいへば、其價値の存するは既に知るべし。敎授法及び裁方縫方等を丁寧細密に初等生敎授の爲めに參考をなすと甚だ多しさ見えたり。書は敎授術を述へたる各編、裁縫術を述たる後編、參考を述べたる附錄の三編より成る。

海戰畵帖

若林欽著
第壹集黃海の卷
定價七十五錢

職は海軍大尉の籍に在りて、而して又丹靑の道に狂せる若林欽氏が、日淸戰爭中、軍に從つて、劍を握るの隙には、其筆を執りて、彼壯然また慘憺たる戰況の實際を描きさゞめたるもの、今海戰畵帖さなりて、續々出版せられんさす。素人見ながら、若林氏畵道の熟達頗る欽すべきを覺え、其筆によりて、當時の壯況慘憺を

忍ばしむるに餘りあり。幾種の他の戦爭畫帖の漫に、誤り多き想像を做ふて成るものと異なり、これは是れ、其實況について、其妙筆を働かすもの、故に同種中の最上乘なりと稱すべし。

さんざ時雨

麗水生作　春陽堂版

伊達家の老職片倉小左衞門の家臣の、今は讒者の毒害に懸りて、身を浮草の泪々の世渡り辛き淸川右内、多年の眼病双眼腫れ塞かりて、物の文目もわかぬ不幸、果なき浮世の命綱とては、愛娘の雪枝と呼べる今年十八の美少女と、譜代の忠僕、六十にも餘る老の鎌六とあり。扨も不幸なるかな右内、雪枝は惡黨旗本鬼島玄蕃に拐帶はされ、失望また失望、更に世を果なみて、自殺せんとすること幾度、爰に鎌六の忠義は、當時大江戸八百八町に、俠名芳しかりし吾妻大五郞の義氣を催促して、雪枝の苦節、右內の悲運を救はんが爲に苦心慘憺し、それが爲にまた、當時羽振威勢の尤も秀でたりし御小姓稻川伊豫守の芳心を做ひ來りて、天人に勝ち、善惡其酬を得、苦樂地を變え、瀕死の鎌六が、吾妻親分の義俠よりの公罪に代りて、大五郞再び時雨小夜五郞の俠名を天下に鳴し、雪枝彼を天晴日本の花婿として得るの筋書、麗水これを描くを勉めて泪六張りを擬ふ。然れども、もとより小說作に於て未た多くの成功を示めさゞる麗水生が、血よりも涙よりも先づ都新聞紙上の紋物として日々の讀者を飽かさぬやう明日はどうなるかく〳〵とまち望ましむるをを心掛たりと見ゆる程の作品なれば、其美文としての價値は多くいふべきに非ず。然れども、これまた、兎に角に時候柄消閑の一粲として、一讀の花客を引くこと多かりしならん。

かるかや物語

中谷無涯作　新小說第二號

其觸れ出しにては、露伴を壓すと稱する、中谷無涯生となんいへる初陣作家が新小說第二號に載せたる此『かるかや物語』、行文甚だ露伴の風骨を擬するに勞したるものゝ如くなるとは、僅に其一端を擧げて其火災の慘然を寫するの文字が、五重塔の風伯退威の文字より脫化し來りたるを見ても知らるべし。文字險に奇に、又妙に、處々頗る誦すべきのものなきに非ず。然れども全篇描く所より推し來れば、自ら先づ熱せず、狂せず、情なくして、熱するが如く、狂ふが如く、情あるが如くに、漫に文字を役するの誹譏なき能はず。又全躰を一篇の叉小說として見るも、あまりに大袈裟なる舞臺を案じ過ごして、ために支離滅裂を來たせり。始めは、一人の畵狂を描かんとするに中心を置くが如くにして、しばらくすれば、この畵狂と極めて些小なる緣にたよりて、色情狂を現はし出だし、彼を描くたに全篇の大部分を費やして、其間、畵狂の擘は全く舞臺の外に驅逐せられ、終りに至りて、忽然として畵狂が、行かひ速き雲間の月のやうに顏出して譯もなき相なる狂設を示し、格別思ひも深からざりし如き愛人の死の爲めに狂ふなれど、扨て〳〵讀過し來れば、讀む人ごとに、誰しも此小說は一向に緣きあひが解らぬと嘲つも無理ならぬとこ。一篇の人物中、其三人迄は狂人、而して其第一の主人公として、主として描かんとしたるものは、彼畵狂か、果たまた此色狂か、其何れを知るに迷ふ。然れども、如斯くに描かんとして如斯に成したりといはゞ、此作小說としては、全くの失望なりといふべく、たゞ文字時々誦すべきものありといふを稱するにやまんのみ。左れど無涯子たるもの、此作によりて、プロミツシングなる作家の價値を相應に示したるとなれば、初陣の失敗を意とせず、脩養更に多きを加へよ。また徒らに空文情に熱を衒ふをとなくして、まづ心より情熱あるの作家たれ。露伴の『夏夜問答』頗る讀むべし露伴が此種の文字、續々此新小說に上り來れかし。

秋の夕ぐれ

櫻痴居士著　春陽堂出版

香具師の松明長兵衞といへる惡漢、片輪娘を買ひ出しに赴きて、首尾甘く行かざりしを歸路に殺され居たる飛脚の持ち居たる手紙にて、信州高遠の笹尾元右衞門といへるものが、江戶の御飾師御用達で、天保十二年御趣意の砌流島の刑に處せられた高井庄兵衞から金五千兩を預り居り、これをば庄兵衞御赦免後其島に流浪中懸意になりたる伊勢松坂の吳服問屋松坂屋彥右衞門の手を經て、彥右衞門が娘お德の許嫁庄兵衞が二男新三郞に返與するとの事を知りて、爰に五千兩儲ける惡事を企て、仲間を集めて丁度彼新三郞の兄の源三郞といへる道樂者が零落して惡者仲間の林屋方にブラ〳〵せるのを奇貨とし、彼れをして新三郞に代りて松坂屋の娘と結婚し、一万五千兩の持參金を得せしめ、それで自分等が甘い汁を吸はんとしたるを、豪氣の新三郞之を探知することゝなり、困苦慘憺、遂に惡漢の奸謀を破

り、長兵衛をして積年の悪行を懺悔せしむるといふが、即ち『秋のしぐれ』の大趣意なり。御熊婆の改心、源三郎の妻お幸が苦節、其お幸が親といへるは乞食坊主の中鐵、實は三輪綱之助といへる元は名字帶刀御免の分限者にて此者芝增上寺の普請事より、伏見屋九郎兵衛即ち松明長兵衛の惡計の爲めに、身は不慮の罪過に處せられ、また其妻お澤は長兵衛が爲に殺され、家燒け、財亡び、罪赦されて後は、淺間しき乞食の境界に沈落して、不思議の事より其娘が、入水を救ふ事など、これ篇中を文ざるものなり。

著者のいへる如くに、まことの小說は、全躰演劇脚本の筋書に近く、其方に等しく直したるが、却て面白味あるべきか、筆力文章は、流石の居士なれば、申樣もなきが、全躰小說として明らさまにいへば、居士の名を冠して居る丈けの價はなきやうなり。

大倭心　第一號

女教社雜誌『大倭心』なり一婦人新に九月十日を以て生る。其躰裁なでしこと伯仲の間に在り。吾黨一友を加へたるを賀す。

壽王冠者○心の緒琴○名人逸話○新小說第三號の批評は次號に廻す。

○女學論壇　自八月廿五日至九月十五日

◎能忍婦人會發會式を祝して一言を述ぶ(松山託瑞)　彌天教報第二十號
◎露國女傑ノヴヰコッフ夫人　明治評論第十號
◎女子と文學(福島靜齋)　日本人第二十六號
◎女德とは何ぞ　教育時論第四百十號
◎肉妻放任の餘論(小林晦齋)　教友雜誌第二百六十一號
◎女界の立道興教　大倭心第一號
◎人道女道及び婦道(勝鬘庵)　同
◎女子教育一斑(二十四)(三輪田まさ子)　女鑑第百十六號
◎家法を立つべし　教育報知第五百二十二號
◎令孃氣質一、二、三、　讀賣新聞八月三十一日、九月二日、七日
◎嫁入支度の策　每日新聞九月八日九日
◎美人、醜婦、想像的美人、女子教育、日本國の美人、美人の要求、哲學的女子(蕨村生)　教育時論第四百十一號

文界片々

◎横井時雄氏　泰西思潮一斑を記して冒頭に曰く、今より七八年前に在てはアンドバ神學とさへ云へば異端の骨頂とし忌み嫌はれしも、今は寧ろ保守の神學として識者に認めらる、今や學理の勢力すでに大躰に於ては傳說迷信の勢力に打ち勝ちたり、殆んど何人も進步神學の必用を認めざるものはあらざる也と。告白例の如く勇猛なる哉。

◎世界の日本　は其の「道聽塗說」を以て奇重とす。人を許するも大率れ世論と異なりて而も要緊に中る。これ世上爲にするあるの立論と相反するの故か。然れども、伊藤陸奧の二氏を說いて明々地に其本領を分解せざる尙惜むべし。然れども二氏の如きは亦到底此諸の辨解を要すべきもの也。

◎白根專一　は是れ注目すべき人物なり、世界の日本記者遂に亦た之を誤まる、何の爲ぞ。

◎明治評論　の編輯や、調査周密、材料精撰、眞に有數のもの也、而して發揮せざるは彼の如き實に惜しむべし。蓋し新聞雜誌は人を代表す。故に明白に主筆を示さゞるものは、十に七八を損す、亦奇ならずや。

◎漣山人の才　漣山人の小說に於ける、吾人は常に其造詣巧致の未だ深からざるを見る。然れども其幼年文學に於ける彼を見れば、才氣圓滿に活動し、幼兒が性の要求する處に、好適するの無邪氣なる文字、物の自然なるが如くに表れ來るの觀あり。當代の幼年文學、恐くは山人に過ぐるものなけん、其實を知らんと欲せば、乞ふ一部の少年世界を讀み來れ。今もし漣山人をして此上に多くの宗教的熱誠あらしめなば、彼が幼年文學は古今獨步を以て稱せらるゝに足らん也。

◎人の譏評に　腹立たゞしく、滿腔の罵言を鳴らすと、霹靂の如く轟然たるも、人はたゞ一寸面白として、讀み過さんのみ。

◎近松研究　篁村、逍遙及び彼が學徒、早稻田によりて、巢林子が戲曲の研究をなす。研究者其人より、さればそれ當時文界見るべきの興味あらん。

◎吁今の小說家　乏しきものは、宗教的熱誠なり、高尙神聖なる生涯の經驗なり。彼れより狹斜放遊の經歷を去らしめよ。彼如何にして、今日の賴み難き名をだに成し得べきか。

片々

◎埼玉縣の　學年施設報告に曰く兒童就學の增加せざるは其原因主として女子教育の振はざるに在りと。

◎死亡せる妻の　姉妹を娶ることを許すべしとの法律は英國上院第二讀會に於て百十二に對する百四十二の多數を以て、無事通過したり。

◎支那婦人　其上等社會に在るものにても、教育は之を家庭教師に受けて、僅に三字經、百家姓、千字文、千家詩、幼學、女四書、女孝經の素讀を學ぶ位の事に過ぎずといへば、一般女子の教育以て推すべし。哀むべきかな。

◎一葉女史　其小說を以て新刊女教社雜誌『大倭心』に筆を執らんとすと。而して女子久しく病んで未だ起たず、文界は永く其美文に會せず。由來芳蘭柘風多し、乞ふ自愛せよ。また一には女子、假令健腕健筆を得るとも深く自重して、多作の弊に陷らざらんことを望む。

◎某大學敎授　の女德說といふもの敎育時論に見ゆ、要に曰く、男女も人として の共通の道德を知りて後、男は男らしく、女は女らしき、特殊の道德に入るべし。今の女德敎育なるものは、此共通の德義を顧みず、初めより一徹に唯女らしくせんとするの傾向はあらずや。斯くては女子は狹隘なる道德の範圍に跼蹐し、夫と家族と社會國家とに對する調子偏狹とならずやと。

◎配偶者數　最近統計年鑑によれば、配偶者千五百三十六万千四百五十八對、而して總人口四千百八十一万二百〇二人なりといふ。

◎華族の數　現在にて公爵十一人、侯爵三十四人、伯爵八十五人子爵三百六十二人、男爵百八十人、總數六百七十二人なりといふ。一雨下ればまた增加せん。

◎國民の友　東西南北生曰く女子教育は內行嚴正にして、毫も批難を受けざる人を要するとは言ふまでもなく、進步的にして、而も着實なる人を要す。予の所見を以てすれは、福澤諭吉翁の如きは、最も女子教育者に恰當ならんと思ふ。現今の政治社會、殖產營業社會新聞社會及ひ男子教育は必ずしも翁を要せず、女子敎育は大事件なるが故に之を翁に托せんことを欲すと。

◎日本人　福島靜齋氏『女子と文學』を論じて曰く、想ふに文學界は、夫れ遂に女子の獨り占むる處となり了らんか。天は男女兩性を作り、各者に與ふるに思考力を以てし、後者に授くるに思想力を以てし、後者に授くる直覺能力を以てす、是れ人類を折半し、一をして科學の研究に從はしめ、他をして文學の生出に從はしめんが爲めに非らざるなきやと。

◎帝國大學生の惡風、惡風帝國大學生に浸潤して、彼等が中には、待合に出入して、賭博を弄するの弊風に染み、其最も盛なるは法醫科の學生なりといふ。帝國最高教育の府たる大學の風紀如斯く亂るゝこと實に慷慨せざるべけんや。

◎島根縣の女教員　同縣教育現況を報ずるものゝ曰く、小學女教員は如何なる故か、縣下にあまり歡迎せられず、これが養成を廢するに至れり、されど高等女學校を設立せり。同縣下は女子の風儀至て惡しく、私生兒を產する女教員など往々あるがために、女教員を喜ばざるものならんかと。

◎露國女傑　ノヴヰコフ夫人其才筆と巧辨とによりて、英露の外交を親密ならしむの力、甚だ大に、其力よくグラドストンの老雄とも掌中に丸め込みたりと稱す。由來外交の事、女子の力を要すること多し、よく之を利用するの政治家は即ち外交の機敏を以て稱せらる。

◎工女教育說　頃日京都府加佐郡教育部會に於て工女風儀矯正策を講じ、普通教育を受けたるものに非らざれば工女に採用せざること、または普通教育ある工女には金銀を增加すること、工女は多く兒守より出づ、故に兒守を矯正し、俗歌に代ふるに純美なる唱歌を以てすることも急務なりとし、其他種々の方法によりて工女教育を獎勵し、隨て女子就學の奬勵を來たすの策を述べたり。これ工女教育の事多く注意せられ來りたるの一現象と見るべし。

◎非自轉車運動　十九世紀は自轉車の時代なりとまで稱し米國社會今や殆ど自轉車熱に狂す。これが爲めに、酒類、煙草、新聞、帽子、衣服、ピアノ等の賣行き惡しくなりたるばかり、されば男子のすることならば、何事でもする主義なる同國女子の自轉車狂は推して知るべし。然るに近頃婦人救濟同盟會なるもの彼國に興りて女子自轉車使用の反對運動を試むるよし。

◎育兒の風習　東京人類學會々員有志者は、本年夏期明治義會夏期講習會を期と

して、土俗談話會を開くの例にて、今年は八月廿二日に其第四回を開き、其節の問題は、『育兒風習』といへるに、其の箇條は左の如くなりしとぞ、蓋し頗る有益興味ある問題といふべし。

(一)初生兒を何と稱するや。

(二)二三才以上の男兒格段なる名稱あるや。

(三)母の乳汁は何才位迄與ふるや。

(四)小兒を喜ばすには如何なる語を用ふるや（東京にては一つお笑ひなさいと云ひて後に舌にて音をさせるなり）

(五)泣くを止めさするには何と云ふや（東京にては「チーよし〱〱」なと云ふ」）

(六)眠らする時の歌にて最も普通のもの如何(東京にては「ボーヤは好い子だねんねしな」)

(七)手の運動を習はする時何と云ふや（東京にては「にぎ〱」「おつむてんてん」「かいぐり〱」「とつとのめ」等

(八)大小便をさす時何と云ふや(東京にては「シイー」「ウーン」

(九)歩き習はす時如何にするや(東京「こゝ迄お出で甘酒進上」云々)

(十)小兒に咄して聞かする昔咄に最も普通なるは何々か（東京にては桃太郎猿蟹合戰等）

(十一)初生兒の玩具中、最も普通なるものは何か。(東京にては、犬張子、おしやぶり等)

其他右に類する諸件

◎三輪田眞佐子女史　其才識よりするも、其德行よりするも、女史は當代重んずべきの老女子教育家たり。女史其健腕の文を以て、女學を論ず、論ずれば、必ず天然なりといふ。其『女子の本分』等を見、また近時『女鑑』等載する處の文字を見て、之を知るべし。吾人は之を見て、女史天地妙致に造詣するとの深きを知る。

◎ペスタロッジ、フレーベル館　伯林なる同館は千八百七十二年シュレーデル夫人首唱創立する處にして、最初は唯一個の幼稚園たるに過ぎざりしが、熱心なる名譽職員等此館の整理委員として、漸次其必要に隨ひ擴張し來るものなり。今其現況によれば、幼稚園兼豫備學校ありて、二歳中より、七歳中に至るまでの兒童に備へ、(此學校を去りて、尋常小學二年級に入るを得せしむ)、高等女學生の爲めには、寄宿學校あり女子をして、良妻たらしむるの、家事教育學校あり、高等職業練修學校ありて、上流社會の實地料理法を教へ、又師範學校ありて、幼稚園教員の養成を圖る。(大日本教育會雜誌)

◎沖繩の男女風俗の差異

男子は帶し　女子は帶せず
男子は長袖を着け　女子は筒袖をつく
男子は遊惰に耽り　女子は商工農に勉む
男子は下駄を穿ち　女子は跣足なり
男子は簪二本をさし　女子は一本もさゝず
男子は美しく結髮し　女子は單に髮を頭上に束ね
男子は袴を穿たず　女子は袴を穿つ

◎厳村氏おもへらく　愛美音を形德行の三者に兼備したるのみ女子美人なり、此美人を教育するは、女子教育の目的なり。かゝる女には哲學的女子となすと。

時報

◎熊本縣教育會の高等女學校設立建議案

來年三月を期して、將に長崎に開設せられんとする、九州沖繩八縣教育大會に提出する爲、熊本縣教育會の考究確定したる諸問題中其第三條に曰く

○高等女學校を府縣に設置するの建議

理由　明治十九年四月、勅令第十五號中學校第十四條に高等女學校は、女子に須要なる高等普通教育を施す所にして尋常中學校の種類とすべし。其設置は之を府縣の自由に一任せられたりと雖も、時務の趨向は、當時の情況と大に趣きを異にせるを以て、自今第六條中學校は、各府縣に於て一校を設置すべきものとす。但し土地の情況により文部大臣の許可を得て、數校を設置し、又は本文の一校とを設置せざるとを得(廿四年勅令第二百四十三號改正)と同樣に變更改正し、府縣をして、必ず之を設置せしめんことを希望す。

◎保姆練習科生徒募集延期

女子高等師範學校に新設せられたる保姆練習科入學志願期限は、九月七日迄なりし處、今回十月十日まで延期の旨廣告ありたり。

◎九州鐵道の女子使用

九州鐵道にては、今回新に女子を用ゐて列車の掃除等に當らしむることゝなしたるに、其成績頗る宜敷きものありといふ。

◎夫人正法會の海嘯義捐

府下宗教的婦人會中貴顯紳士の夫人令孃によりて組織され雲照律師が監督の下

に頗る盛なりと稱すべく機關雜誌としては『法の母』を發行する彼の目白の夫人正法會にては、三陸海嘯罹災者救恤の爲め、衣類等の募集を爲せしに、忽ちにして五萬餘點の多きに達したれば、之を分與するの良法を計り、三縣下各地に於ける受施者の人數を豫め其筋に問合せ、成る可く均等に分與せんとの考へにて、二三點或は四五點づゝ一まとめに束れる等にて、非常の手數を要するに因て、同發起者たる山田、鳥尾、三浦、田中、鍋、玉置、兒玉の各令夫人を初め、有志の母堂令室數十名日々事務所に出勤して、荷造等に盡力し右準備終て發起者各夫人より、救恤品の加持を乞ひしに依つて、雲照律師は法規の加持をなし、夫れ〳〵被害地へ送りたりとぞ。それと同時に本眞尼といへる比丘は、二人の徒弟を隨へ該物品配與の爲め、かつ傳道の爲め出發し、目下三陸地方に德音を鳴らせるよし。

◎節婦賞を賜ふ

横濱市戸部町二丁目三十一番地笠松又三郎妻まさ（安政五年生）は、神奈川縣三浦郡鴨居村の農家に生れ、明治七年（十七歳の時）又三郎に嫁したる者なるが、當時又三郎は刀劔研職を爲し、相當の生計を立て居りしに、其翌明治八年頃より又三郎は脊髓病に罹り、手足の運動自由を欠き、殆んど癈疾の姿となり、越えて明治十六七年頃より、身體全たく自由を失ひ、職業を爲し能はざれば止むなく一時古物商に轉業したるも、素より資產に乏しく、且つ病氣なる爲め商業捗取らず、漸々零落し其日の烟も立てかぬるまでになりたり。然るに長男祐吉（明治九年生）と云ふがあり裁縫職工なれども放蕩にして寄付かず庶子ますも病身にして、家計の助けを爲し得ざるのみならず、今年一月病死したり。此外に親戚とてはまさが生家あるのみなれど、父は先年死亡し後は病氣の母と兄とありて、弟萬次郎が辛苦の中に細き煙りを立居る程なれば、援を乞ふ道とてはなし。さればまさは毎日他人の衣類洗濯洗張等の賃仕事を爲し、辛くも一家の糊口を凌ぎつゝ、傍ら病夫に事へて、貞實を盡し、又腹變りの子ますをも教養し、長男祐吉の身上を苦にする抔一方ならざる困難を重ねしも、少しも其志操を變ぜず、善く婦道を守ると廿年、一日の如く誠に貞女節婦の龜鑑なりとて、九月二日中野縣知事より賞狀に添へて金五圓を下賜されたり。（讀賣新聞）

◎明治女學校新築費義捐慈善會結末報告

去る六月下旬に芝紅葉館に於て開かれし同慈善市の結末報告によれは各途收入二千五百二十五圓、九十五錢八厘、支出三百十九圓九十七錢六厘、差引總益二千二百〇六圓八錢二厘は明治女學校へ寄附したり。

◎帝國慈惠醫院　なる者大阪に在り、三陸海嘯罹災者の子女十二歳以下の者を救養すといふ。

◎製糸法講習會　茨城縣稻葉郡岡田村は、農蠶業稍盛んなりと雖も、製糸業未だ全く發達せざるを以て、有志者これを憂へ、八月六日より、同十五日まで、同村内の尋常小學校の卒業の女子にして、年齡其業に堪ふる志願者を會して、製糸法講習會を其尋常小學校講堂に開き、講師としては、同縣屬技師出張したりといふ。

◎靜岡東海女學校　宇宙神教派に屬する全女學校、數年刻苦經營の結果、生徒數四十名、方今多望の佳評あり、此際一層擴張の方針を採り、校舍宿舍をも增築する由『宇宙神教』に見ゆ。

◎明治婦人會　高知縣香美郡明治村にては本年一月同地小學校訓導和田茂喜氏の發起にて明治婦人會なる者を組織し專ら婦女の德性を涵養し傍ら處世の道を講習し居りしが昨今に至り會員續々增加して百餘名に達し尙ほ益々盛運に向ふの有樣なるより此程其事務を擴張したる由又同會の發起にて八月廿一日濤淵中學校教諭を聘し同小學校内に於て婦女道德、子弟薫陶等に關する講話會を開きしに來聽者四方より集り場内爲めに狹隘を感ずる程なりしと。（土陽新聞）

◎茨城縣教育會　高等女學校設立の建議をなす。

◎田澤稻舟女史　白薔薇の小說は吾人をして、甚だ面白からず感ぜしめたりと雖も、なほこの田澤女史が俊才ありし、美妙との天緣全からず、破鏡の苦嘆、遺恨に、綿々の情を洩しつゝも、終に制する能はず、さきに自から毒を服して、而して未だ死すると能はず、爾後病革するとの報、屢々之を耳にせしに、哀れむべし、本月十日に至りて女史遂に逝くと。秋風既に袖を吹くと雖も、いまだ梧桐一葉を亂さゞるに、この多望の才人、忽ち落ちて水に流る、殊に其苦境悲運の愍むべきに悲しみを寄す。

雁なきて秋風さむくなりにけり
ひとりやれなむ夜の衣うすし

鎌倉右大臣

『前號ストウ夫人記事中　夫人筆を下して先づ、トムの頹死を描きしやうといへるは、實はトムの死を大眼目として、彼の小說の結構をなしたりといふの誤りなれは訂正す』

女學雜誌増刊の預告

本誌の同人志を起して海外傳道の事業に合力せんと思ひ立ち斷然情義を割きて本誌發行の度數を減ぜしより此の方、正に二星霜を經たり●當初同人の決意は尋常ならず、社員某の如きは自から身を挺し二年月間奮然本土を辭去すべしと迄で定め居たりしが、世態幾變遷、人事大率ね意料の外に出で、當初の計畫にして未だ成就せざるもの十にして尚ほ七八ありと言ふべし、豈に悲しからずや。加ふるに此間不慮の災禍あり、私情素より舊はず。之を公にしては義戰の終末蛇尾に了し、邦家の遺憾千歳に徹す、内外惣べて逆運に際すと云はざる可らず●但だ夫れ當初『海外傳道』に發企せし諸盟友の抱負は逆境の故に收縮することなく、隆んに事變を踏破して着々勵行し、今や大日本海外敎育會の名を以て現に朝鮮京城に施しつゝある京城學堂の敎育事業は、方今惣べて朝鮮國より引擧げたる日本人の事業中、殿遺せる唯一の紀念とは爲れり。而して、此事業の基礎今や確乎として最早や拔く可らざるの根柢を得たり、惟ふに將來同胞の扶助を得て更に一層の進歩を爲すべきか、是れ吾等の深く慶する所也●飜つて、女學界の形勢を察するに、明治二十二三年以來の反動は次第に薄らぎ、昨年下半期の頃より漸やく隆運を兆し、本年に入つて、晩回復興の盛機正に熟せり。女生就學の數大に增し、女學校新設の數俄に加はり、婦女の爲に發行する女學誌類の續々として創業し來る如き皆な此の大勢發動の現象なり●此に於てか、社友連りに促がし、本誌の增刊を勸奬せらるゝこと、極めて優渥信切なり。吾等素より意なきに非るも亦た當年の所期あり、懇ろに陳謝して則ち今に至りぬ。則ち今や之を增刊するも亦不可なきの時か。發行を減じて社友と相逢ふことを少くせしより以來正に二年、些さか本末を明らかにして終始の義を完くす。世上の知己、幸に微衷を恩察し、過前の疎薄を容るして、將來の厚庇を垂れよ。

増刊の事情

一　自今女學雜誌を月二回の發行とし、毎月十日、廿五日の兩度出版すべし。

二　廿五日發行の分は即ち從前の如し。十日發行の分即ち增刊する所にして、本號の如し。例するに本誌の稍や簡易實際を專にし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答、等の諸欄に重きを置くべし。

三　本誌の定價の割合に廉ならざるは、特に遺憾とする所なり、然れども事務に迂なる吾等の事業に於ては之を如何んとすること能はず。即ち、定價は元の如く、一冊無郵稅十錢に定むべし。

四　單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば、其望に應ずべし。

來月十日發行の分附錄預告

來月十日發行の雜誌(即ち增刊の初號)には、近頃ろ五島博士が獨逸より齎らしたる伯林美術展覽會近年著名の新畫「信、望、愛、三佳人」の寫像を附錄とすべし。

以　上

女學雜誌社　白

明治女學校新築費義捐

第四回報告

金貳千貳百〇六圓八錢二厘也　慈善市收入純益
小鹿島筆子殿
加藤とし子殿
横井たま子殿
津田梅子殿
瓜生しげ子殿
矢島かぢ子殿
雜賀あさ子殿
木村かめ子殿

金五圓也　足利　田中正造殿
金十五圓也　同　荻野万太郎殿
金十五圓也　同　磯部安二郎殿
金十圓也　同　原田光次郎殿
金十圓也　同　荻野文八殿
金十圓也　同　原田政七殿
金十圓也　同　新井　殿
金一圓也　同　相塲杢左衛門殿
金二十圓也　長州馬關　富海松兵衛殿

明治女學校高等自修生貸費寄附
金百六十八圓也　栃木縣安蘇郡三好村　蓼沼丈吉殿

明治女學校基本金寄附
金十圓也　齋藤音作殿

帝國文學

第二巻第九

目次

發行所　東京市京橋區銀座一丁目二十二番地　大日本圖書株式會社

特別會員（イロハ順）

侯爵 伊藤博文
伯爵 井上馨
伯爵 板垣退助
岩崎惣十郎
五十嵐敬止
井上藤太郎
伊藤一隆
伊豫田德次郎
伊藤鎬之助
猪俣吉平
巖本善治
早川智寛
馬場民則
原田助
仁平豐次
本多庸一
東奥義塾

侯爵 德差藤兵衛
伯爵 土居勝郎
子爵 德富猪一郎
大山巖
大隈重信
岡部長職
大脇克信
大井上輝前
小倉格
押川方義
子爵 渡邊國武
渡邊澤次郎
勝間田稔
加藤宇兵衛
川口榮之進
片岡健吉
神田乃武

通常會員（イロハ順）

石川和助
岩淵謙之助
入江祠衛
伊澤修二
今井榮吉
池田米男
石田英造
今井茂助
岩本久米三郎
岩谷よしの
石山治三郎
伊藤泰造
猪又譽平
岩淵文右衛門
磯野員爲
石田源吉
岩谷幸助
石澤末次郎
池袋宗政
石田祐安
今野甚伍

猪股貞太郎
五十嵐貞碩
橋本宗之進
橋本經光
長谷川有造
林弘之
萩原佐朝
秦孝道
原賢次郎
早坂貞次
長谷川忠助
原胤昭
間半四郎
西牧廣
丹羽清二郎
贄田剛橘
新渡戸稻造
丹羽金十郎
星野久成
星野光多
細野貞次郎

芳賀重太郎
細川瀏
戸川平八
德永孚次
土井久壽彦
泊谷喜八
德光太次郎
戸田長八郎
豐島三策
戸川安宅
富田廣信
小方仙之助
大石悳英
小崎弘道
小野英二郎
大久保寅吉
岡貞吉
押川つれ
岡部久吉
大室隙夫
岡本一之助
大竹敬助
大橋代吉
尾花芳重
奥村忠太郎
太田莊十郎
太田六四郎
小野寺義卿
小野宗助
大環修
大家興次郎
奥山十平
小野川駱駝郎
小舘隼之助
大塚賀久治
岡本米藏
奥野太郎兵衛
小野田卓彌
和知牧太
若生德造
分部盛之
渡邊喜久
渡邊俊治
渡邊美賀
渡邊常吉
蒲田廣
川合信永
河合篤敍

鎌田善三郎
勝又昱
鎌田三之助
加藤政之助
龜谷卯之助
川崎敬三
川口源三郎
加藤勝彌
吉田龜太郎
吉田潤吉
田澤納三郎
田村武治
竹内清明
田中耕一
高橋深三郎
龍居賴三
高木壬太郎
田中義一
鹿島秀麿
勝田孫彌
金澤彦作
伯爵 吉井幸藏
竹村櫨六
田村顯允
高田耕安
相馬愛造
相馬伊三郎
對馬嘉三郎
中野武營
中川嘉平
村松龜一郎
植村澄一郎
子爵 野村靖
野村新一
日下義雄
陸實
久保扶桑
楠本正隆
八尾新助
田代進一郎
高城龜三郎
田口榮吉
谷山豐熊
高杉榮次郎
高野源之助
高橋俊英
六岡直次郎
武市健雄

田母神幸三郎
高山善右衛門
高橋敬太郎
男爵 伊達邦成
但木眞次
伊達基寧
庄司鐡三郎
筒井助熊
塚本又喜
土田熊治
築瀬仁右衛門
土橋藤市
根本正
名出保太郎
檜橋盛次郎
奈須川光實
村上春太郎
村上勉次郎
上田貞眞
鵜飼友三郎
浦山助太郎
上床仲之進
上山金之進
野崎民之助
工藤善太郎
楠美冬次郎
熊谷駒之助
栗原宗治
桑原慶太郎
栗田壽吉
熊野雄七
栗林五朔
山内龍吉
山崎總次郎
山川磯吉
山下廉
矢野鏡太郎
柳田喜兵衛
山路彌吉
山城彦熊
入卷文彌
松田國太郎
松田順平
益子惠之助
増子喜一郎
松岡馨兒
松田常吉
濱武

子爵

眞木重遠　谷津菊右衛門　八木橋榮吉　前島密　松村介石　福原允　藤澤幾之助　榎本武揚　遠藤庸治　江原素六　安藤太郎　阿波松之介　厚地政敏　齋藤信太郎　櫻井一久　佐々木宣耀　佐和正　佐藤鋭太郎　榊吉洋芽　山東直砥　坂本直寛　佐野喜代吉　松本誠助　松浦嵐之助　松田煙三郎　松潟友吉　桝浦保治　松井三郎　松崎誠一　福井捨介　古澤繁次郎　福田鋌二　福間文太郎　福澤定典　深田藤治　深田惣治　二見嘉次郎　小林光彦　小島玄　後藤顯美　小西増太郎　後藤嘉右衛門　小松亞弘　古賀公平　小出龍太郎　後藤元城　小山善太郎　小泉秀一郎

子爵

小島今朝次郎　海老名彈正　遠藤元寛　寺澤靖一　寺岡重之介　寺井純司　新保章二　秋說晴　秋山春齋　荒木眞弓　青山好惠　相見磐　青山正光　荒生治右衛門　荒井幸作　厚谷善平　秋山峻　佐藤彥三郎　佐藤榮右衛門　佐藤丈輔　佐藤勝治　佐藤助男　佐藤三郎　佐藤豐四郎　佐藤長二　佐藤久作　佐藤究　佐々木市造　佐々木廉藏　佐々木純一　佐々木榮介　櫻田顯華　佐伯陽一　清浦奎吾　北里柴三郎　北垣國道　菊池九郎　三宅雄次郎　三枝光太郎　水野義郎　三好退藏　品川彌次郎　島貫兵太夫　島田操　島田三郎　鵜澤毅一　平田文右衛門　本部泰

子爵

世良田亮　鈴木眞一　鈴木重遠　杉村濬　佐間萬吉　佐藤勝三郎　佐藤清　齋藤常太郎　佐々木重四郎　佐藤眞太郎　佐々木和策　齋藤徇　佐藤昌介　笹森宇一郎　齋藤壬生雄　北山嚴　北山長次郎　北山彥作　貫山幸次郎　木村斧彥　木名瀨宏　桐山三四郎　喜多島慶四郎　菊地宅藏　三島彌太郎　三上久滿三　三澤富之助　宮大甚兵衞　三浦宗三郎　宮崎八百吉　宮原正綱　宮崎金吾　宮川經輝　美山貫一　三浦虎彥　宮島昇　南泰作　島崎宜信　清水正史　寶相寺利氏　信太壽之　芝山幾作　神宮茂八　樋池富惣治　光小太郎　日野愛寮　平澤幸太郎　日野貞治

平間彌五郎　本野小平　森野左近　本川源之助　森善太郎　尺秀三郎　芹川得一　菅田勇太郎　須藤鬼一　鈴木味右衛門　菅波至善　鈴木太郎作



東京麹町區富士見町二丁目三十二番地

大日本海外教育會

○大隈伯は金五百圓、野本子爵は金三百圓、岡部子爵は金三百圓、鈴木眞一氏は金三百三十圓、押川方義本多庸一二氏は各百五十圓寄附せられたり。其他の寄附は追て報告すべし。

女學雜誌定價表

前金	一册	金拾錢
	一年前金	金壹圓

（無郵税）

明治廿七年一月十四日　内務省許可
明治廿九年九月廿四日　印刷
明治廿九年九月廿五日　發行

編輯兼發行者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

日本宗教界評論の評論

日本宗教

九月廿日刊行

第二卷第三號要目

肖像(寫眞版)、島田三郎君・大内青巒君

○宗教道士、方今の痛恨 社説
○加藤博士に答 社説
○宗教家懇談會 社説
○文字言語に執着すること勿れ 社説
○余の宗教觀 島田三郎
○眞宗及基督教の中心問題 姉崎正治
○時處位の神聖 櫻井鷗村
○傳教の新方法を論ず 圓環子
○余が宗教的信仰の一景 東根
(又名、幼時迷信の經歴談)
○足利外交と佛教徒 横井雪菴
○日本宗教社に寄す 中村諦梁
○宗教家會合に就ての評論(三種の論評)
○所謂新宗教論の氣運・動反(八派の思潮)
◎寺院問題◎雲照師の敬神奉佛論◎日本基督教の復興及傳道法◎佛教の信仰個條◎電氣の美術的表象◎水戸基督教會布教趣旨書●時事には宗教家懇談會外十數件●新刊雜誌細目錄

一册定價金八錢、郵稅五厘 六册郵稅共金四十八錢見本は九錢を要す。(第一卷第一號より十二號迄合本金壹圓、郵送料別に申受く。)

發賣所 東京麴町區下六番町六番地 日本宗教發賣所

「ベビー」手みしん

「ベビー」も直ちに使ふことを得べし。音もせず、八釜しくなし。机の上に置き座りながら扱ふことを得べし。形小さく、取扱ひ方至極容易なり。直段尤とも廉なり。

右代價正金五圓也

日本及支那一手販賣店 橫濱居留地五十番 エッチ、ゼーデ、ビゾン商店

東京代理店 麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

米國文學博士 經濟學協會々員 松本君平君著

海外製茶貿易意見

定價郵稅共 金拾五錢

製茶貿易は我海外貿易の二大要素、其盛衰消長の關する處、獨り我當業者のみに非ざる也、洵とに四千萬同胞ノ休戚に關する處、甚大也、本春製茶貿易の恐惶は我が生產社會の一大撲擊と云ふべし、抑も此の恐惶の來りたるは決して偶然に非ざる也、其素因の歷然たるもの有り焉、識者は既に昨年に於て、玆の恐惶の來ること有るべきを豫言せり、而して還般恐惶は獨り今日に留まらず、深く警戒豫防する處無くんば、更に大なる恐惶の地を捲て來る無きを保せず、著者深く之を憂ひ、筆を貿易制度に起し、米國の茶況を説き、一大危機の伏すを警告し、日本茶の改良新工風を論じ、貿易擴張の籌策を以て編を終ふ、其備考には茶の由來を記述し、世界に於ける茶の生產消費を詳論せり、當業者此の編を讀まば、世界の市場を大觀して、朗然として大悟する處あるべき也。

發行所 東京々橋區彌左衛門町七番地 合名會社 經濟雜誌社

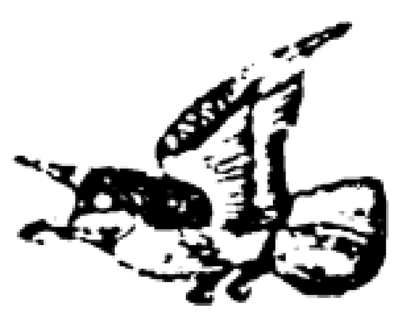
錦織竹香女著

普通裁縫書

全三册 (八月新刊) 正價金六十五錢 郵稅金八錢

發兌 東京市神田區通新石町 同文館

明治廿五年三月十五日遞信省認可



明治廿五年三月十五日遞信省認可